

---

# 異世界情報屋になったぜ！

桜 狂歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界情報屋になつたぜ！

### 【Nコード】

N4710Z

### 【作者名】

桜 狂歌

### 【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公がいるんなアニメの世界へ行き異世界情報屋になるお話です。ついでに言うとなんでもありな主人公です。初作品ですが、温かく見守ってください。

## オリ主紹介（前書き）

作者「記念的な第1話を読んでください」

## オリ主紹介

名前

藍雷らんらい

咲夜さくや

愛称

咲夜、サツキー

性別

女（勘違いで男と思われる事も多々）

年齢

10歳

性格

普段はのんびりしていて、時々ロードのように見えることも多々ある  
多重人格でイノセンスや錬金術を使うと別人になる  
意外とキレやすい

好きな物

アイス、肉、女の子（特に可愛い子）、子熊（白い感じの）

嫌いな物

喧嘩を売ってくる奴、悪党、自慢話ばかりな奴、面白くない人  
気に入らない人

容姿

見た目はハガレンのウィンリィに近い（髪は黒、腰辺りまでのスト  
リート）  
髪はいつもポニーテイル、何故かゴーグル着用、目は透き通った青色

服装

黒のミニスカに胸の辺りがすごく開いてる露出度の高い服、黒のロングコート

二つ名

評議員や表社会からは、白黒情報屋

いつも、表社会の情報や裏社会の情報を持っているから  
闇ギルドなどの裏社会からは、多重人格の魔王  
戦闘で錬金術やイノセンスを使うと別人格になるから

強さ

判定不可能

能力（技や魔法なども・・・）

異常 全知全能

過負荷

大嘘つき（オールフィクション）

致死武器

荒廃した廃花

イノセンス

寄生型で目と喉、装備型で刀を所持

発動時の能力はのちに紹介

ノアのメモリー

始まりのノア 時空のメモリー

テイキの快樂のメモリー

ロードの夢のメモリー

錬金術

呼び名「創造の錬金術師」

ある人の許可が出ればなんでも作るから

魔法 風の魔法

星の滅竜魔道師

星を使った滅竜魔法ができます

星を使うので、魔法がキラキラしています

後に追加していきます。

口癖（一人称）

普段は「僕」で怒った時などに「俺」になる  
ちなみにキレると完全に男みたいな発言になる

相棒（てか執事？）

名前

アキ・フユース（咲夜に義兄にされている）

年齢

？歳（年齢不詳）

性格

誰に対しても親切で優しい、だが咲夜を傷つけられると、キレて悪魔の力を発揮してしまう

普段はまったくもって温厚な人である（咲夜を傷つけられることが少ないから）

好きな物

主人である咲夜、子熊（咲夜と同じ）

嫌いな物

咲夜を馬鹿にしたり怪我をさせる奴、悪党

容姿

簡単に言って顔立ちがハガレンのマスターグ大佐なだけであとは黒執事のセバスチャン達と同じ

口癖

稀に了解した時などの返事が「イエス マイ レディ」になる  
普段だと「かしこまりました。お嬢様」である

## オリ主紹介（後書き）

さっそく長かったっすね。まあ、がんばってやっていきたいと思  
います。

もうすぐ冬休みですし、がんがんやっていきたいです。

追記

原作のキャラ達は使いますが、原作にそってお話が進むかはまっ  
たくもってわかりません（思いつきがあるからです）

## プロローグ（前書き）

新たなる情報屋が今ここに生まれる

って、なんかありきたりな気がすんだけど・・・

## プロローグ

「ありやりや？ここはあどこ？」

ただいま僕は真っ白な空間で座っていた

「ふむ、死んじゃったパターンだね！しかも神様のミスとか！」

「へえ、理解が早くて助かるよ君」

「誰かのお？」

「ミスで君をやってしまった神様ですが、なんでそんな年寄り系？」

あ、気づいたかってか、今神様って言った？

「うん言ったよ」

「おい、地の文に返答出すなよ」

「あ、ごめん」

素直な神様だねいろんな意味で・・・ブフツ  
と内心で笑っていた少女

「今のはスルーしてあげようか」

よっしゃ！やっぱ素直だな

「そんなことより、本題に入るよ」

「どござどござ」

「さっきも言ったとおり俺のミスで君は死んだから別世界へ行つて  
ね」

「別世界だとおおおおおお？！」

(何この子、すっげえ過剰反応なんだけど；；)

反応に驚いていた神だったが少しずつ後ろへ退いていた

「それでね、君には別世界行くついでに特例で異世界情報屋になつてもらいます」

「え、何それ？てか、何で僕なの？」

「いやあ、ちょうど良いところに俺のミスで君が来たからさあ」

うわあ、この神せいよ、ちょうど来たからって  
絶賛、神に対しての文句を放つ少女であった

「そんで、一番最初の世界は決まってるから」

「え、じゃあ、どこ行くかわからないパターン?!」

「そゆことだね、ついでに言うと特例で情報屋やつてもらつから、  
異世界飛び回るための  
能力だけ俺からのプレゼントね」

「あ、よっしゃ!」

ん？待てよそういう能力って期間とかあんの？

「それに関しては心配ご無用」

「また、地の文つつこんだし」

「ま、いいよ、で能力とか容姿についてだけど・・・」

「そおねー、まず見た目はハガレンのウィンリィ似で目は青、髪は  
黒で腰の辺りまでのストレート」

容姿だけでいろいろ注文する少女

「すごいね、いろんな意味で」

「服装については、露出度の高い服でね、それと黒い服はぜったい十着以上はなきゃね」

「そんなに黒いのいるの!？」

「あたりまえでしょ、僕黒が好きなんだから」

「それと、黒のロングコートは絶対ね」

「わかりましたあー」

まったく、曖昧な返事だなあ

「さて、能力は？」

「えっと、めだかボックスの過負荷マイナスで大嘘つきスカーデッド（オールフィクシオン）と致死武器と荒廃した廢花ラフレシアね」

「過負荷でそんな付けるのか」

「アフノーマルオールパーフェクト異常は全知全能ね」

「全知全能？」

「そう、めだかは完成ジ・エンドっていうので本来の持ち主よりも完成された状態で十分に使うものでしょ？」

「うーん、そうだね」

「で、僕の言う全知全能は持ち主の能力を十分に使うのではなく、十全に使うんだよ」

「へー、そりゃあすごいや!」

オリジナルにしちゃすごすぎたかな？

「ほかには？」

「そうだね、Dグレでいうイノセンスね」

「装備型？寄生型？」

「えっと、目と喉に寄生型のイノセンスで、装備型のイノセンスを刀の形で頂戴な」

「え、寄生型と装備型で、計3つもイノセンスを持つの?!」

「だめなわけ？後、ノアのメモリーでオリジナルの始まりのノアとして時空のメモリーね」

「まだあんの！」

「それとテイキの快樂のメモリーとロードの夢のメモリーね^^」

少女の表情にはうつすら青筋が見えた

「な、ななななな、なんかすいませんでしたあああああああ  
！……！」

さすがの神様でも少女の圧力には負けてしまうのである

「ほかにもあるの・・・ですか？」

「んー錬金術かな」

「して、どのような？」

「そさね、創造の錬金術とでも言おうか」

「創造の錬金術？」

「そう、いろんなものを作れるの・・・人体錬成以外ならなんでも」

そして少女は少し悲しげな表情で言った

「わ、わかったよ創造の錬金術ね」

「後ね、風の魔法と星の滅竜魔法ね」

「風はわかったが星の方は滅竜魔法なんだね」

「うん、僕ね滅竜ドラゴンスレイヤー魔道師になりたかったんだ」

「でも、なんで星なの？」

「え、あ、いやあ、いいのがなかったもんでえ」

「そうゆうことか（苦笑）」

あー、他の能力どうしよっかな今言っても神様困るか

「あ、そこについてはノープロブレムだよ」  
「またしても、地の文つつこむし、ひらがな英語だし」  
「そんな言わないで傷つくよ・・・」  
「あ、ごめん、そのとこ気づかなかった」  
「ま、ノープロブレムなわけだ」

また、ひらがな英語てか、なんで？

「君が別世界へ行っても情報などをこちらへ送るために、テレパシ  
ーや通信機をまたしても俺からプレゼントだ！」

「おお、神様太っ腹！」

「そうだろうそうだろう、もっと俺を褒めたたえろ！」

あーすごいすごい神様すごい（めちやくちや棒読み）

「ひでえ、言い方が雑すぎるしかも口に出して言わないし（泣）」

「ま、これで困らないね」

「もう、かなえてほしいことは無いね！」

「いや最後に一つね」

「ええ！！！」

なんだよまだ文句あんのかよ あゝあゝ？

口には出さないが表情で、また出していたのであった  
それを見た神は

（ヒイイイイイイ、やつぱしこええよ、何なんだあの嬢ちゃんよ  
お、圧力ハンパなさ過ぎだ！）

またしても、圧力で負けておびえている神である

「最後は、僕に執事をくれ！」

「え、執事っすか？」

「そう、執事よ。執事って何かと役にたつでしょ？」

「それもそうだね。で、普通の執事それとも悪魔？神？天使？」

「悪魔でお願いね。顔立ちはハガレンのマスターグ大佐みたいなの  
で、あとは黒執事のクロード達とかと一緒にね」

「わかったよ。名前は君が付けてあげる？」

「そうね、そうするわ」

さて、名前か、何が良いかな。あーあれでいいか

「ならば、僕のお兄ちゃんだったアキ・フユースでいいよ」

「何その名前、外人？」

「ハーフだったのよ、生まれたのが外国だったから」

「へえー、そうなんだあ。え、じゃあ君もハーフ？」

「一応そうなるわね」

「じゃあ、君のお兄さんって設定であげようか？」

「それはやめて。でも、義兄という事でならいいわ」

「OK。執事は向こうに行ったら会えるからさ。じゃ、これでいい  
ね？」

うーん、うん他にないな

(はあ、よかったあ)

やっと終わって安心してた神様でした

「それじゃ、向こうについたら、手紙と情報と服一式やらなんやら  
送っておいたから。それと行く場所はすべて君の行きたい所だから、

君も原作知識はあるところに行くと思うよ  
「それって、思うよの話でしょ!？」

あ、どうせだからあれについても言うか

「ねえ、神様よお」

「何さ?」

「名前とかってどうなるの?」

「じゃあ、こん中から選んでよ」

そついうとずらっと細かい文字がたくさん並んだ

「いっぱいだな、つか、細けえな。よしっ、これにしよう」と

「ん、何々、らうらい藍雷 咲夜やんかあ」

「意味は、藍色の雷が鳴る夜に咲き誇れという感じですよ」

「へえ、なんかすごいね」

んじゃ、行くかあ

「君は特例なので、落とさずにこの扉を通って行ってもらうよ」

「お、特例だから落としは無しか、よかったあ」

「そんじゃいつてらっさい」

ギィー ドンッ

扉のドアが開いた途端に神が咲夜の背中を押した

「てめ、神!何すんだこの野郎!」

「さっさと行けっつてんだよ(態度豹変)」

「このくそがあ!次会うまで俺のこと覚えておきやがれえー!」

「!」

さげびながら異世界に飛ばされる咲夜なのでした  
さあ、特例の異世界情報屋がいろんな世界でやっていけるのか

「やっていけらあ（怒）！」

次回へ続くのであった

「ちょ、待て、俺の文句はまだ終わって……」

## プロローグ（後書き）

はあ、こんなんでやっていけるだろうか

ま、行き当たりばったりなお話だから問題ないか（ありありだろ）

てかさ、イノセンスほしいなあ（作者の願望）

「行ってフェアリーテイル？」(前書き)

まずは、フェアリーテイルから行ってみようかな

「こっつてフェアリーテイル？」

「おわつとつとつと。あ！」

ズサーーイーードカン

到着そうそうでバランスを崩し転ぶ咲夜

「あたたた、いってえーなあもう！」

「大丈夫ですかお嬢様！」

到着したそこには執事であるアキ・フユースが立っていた

「ん？ああ、アキか」

「お初にお目にかかります、お嬢様」

「自己紹介はしなくていいからね」

「わかっております。私はあなた様に作られた存在ですから」

実際は神が生み出したんだけどなあ

自分がくれと言ったのをすでに忘れていた咲夜だった

「ま、んなこたあどうでもいいよ、というかここどこ？」

「えーつとですねえ。あ、そういえばここにお手紙が・・・」

「かして！」

咲夜ちゃんへ

今頃は到着そうそう転んでいるのであろう（なんで分かるんだよ！）

そんな君に教えます。まず最初の世界はフェアリーテイルだよ。

ついでに言つと原作開始の一週間前なんでさくつとフェアリーテイ

ルに入つて

ギルド所属してくれない？それで原作関係の人達と行動して情報集めをしてちょ

まあ、軽い情報はここに付けとくからね第二の人生楽しんでね

PS この紙は君が読み終わる頃に爆発するからね。あのときの暴言のお返しだ！

「な、なんだとおおおお！！」

「どうされましたか！？」

「あ、あ、あ、あつちに飛ばせ！」

「わかりました」

カサカサ ピューーーーー

予想外な事に風が吹いてきて勝手に飛んでいってしまった

「あ」

「ありや？」

ヒラヒラヒラヒラ

ポツカーーーーーン

そして飛んでいったと思つた途端に爆発をしてしまい、少し近かつたせいか咲夜は爆風に飛ばされてしまった

「あ、きやあああああああ」

「お、お嬢様！！？」

「アキーーーーー助けてえー」

「今すぐにd……あ」

そこでアキは何か気づいた様子

「お嬢様！その方角はフェアリーテイルのある場所なのでそのまま飛んでいってください！」

「ええええ、そんなああああああああ」

というわけで、咲夜はフェアリーテイルのほうへ飛んでいったので助けてもらうことができませんでした

〜数分後〜

絶賛、落下中の咲夜

しかもフェアリーテイルの真上

その頃の咲夜とフェアリーテイルの人達

ひゃああああああああああ

「ん？なんだこの声？」

「どうしたナツ？」

「いや、どっかから叫び声があった気が・・・」

「そりゃ、ねえーだろ」

「あん？俺を馬鹿にしてんのか！」

「てめえ、こそ俺のこと馬鹿にしてんだろ！」

「んだとおー！」

「今日こそ決着つけんぞ！」

いつものようにナツとグレイの喧嘩が始まった  
だがその日は少し違った

「ちょ、そこに居る人達どいてええええええええ」

「え？？」

ヒューーーーーー  
ズッドーン

ちょうど良い感じに咲夜はナツとグレイの喧嘩している所に落ちてしまった

そして、ちょうどアキも着いたことであつた

「いててて」

「あ、お嬢様大丈夫でしたか」

「ちよつとお！なんでここに来るからつて助けないわけえ!？」

「すいませんでした。この方が手っ取り早かつたので」

「まったくもう!」

「それよりお嬢様?」

「なによ」

「そろそろどいてあげては?」

「えっ?」

フガフガフガアー

ジタバタジタバタ

咲夜に下敷きにされている二人はあばれていた

「あ、やばっ、ごめんねお二人さん、気づかなかつたわ」

「いつてえー、ん?誰だお前?」

「みねえ顔だなあ?」

「あ、初めまして僕、藍雷咲夜といいます」

「さ、さくた?」

「咲夜だろうが!」

「そんぐらい俺にもわかる!」

「嘘付け!」

「なんだとお!」

咲夜の名前からまたしても二人の喧嘩が始まってしまった

(このお二人は仲がよいのでしょうか?)

まったくもってどうでもいいことを考えていたアキでした

「こらっ、やめんか二人とも！」

ゴンッ

「「いだっ!?!」」

「あ、あなたは!?!」

「ん?君はいつたい誰だ?」

「僕は藍雷咲夜といいます。咲夜と呼んで下さい!」

「そうか、私h」

「妖精女王のエルザ・スカーレットさんですよね!」

「あ、ああ、そうだ。私も人気になったものだな」

この人って自意識過剰なの?

「して、君はここに何か用なのか?」

「あ、はいっ。僕このフェアリーテイルに入りたくて来ました!」

「おお、そうだったのか。すまなかったなうちの二人が迷惑をかけたように」

「いえいえ、ぜんぜん迷惑なんて(逆に僕が迷惑かけた気がする・

・)大丈夫ですよ」

「そうか、ではマスターに紹介してやろう」

「あ、お願いします。行こうアキ」

「かしこまりました」

そして、エルザに連れられてマスターの元へ行ったのであった  
更に、マスターの元へ行くまで周りの者達が

(なあ、アイツ見ない顔だけど新人?)

(そうじゃねえのか?)

(へえーべっぴんさんだなあ)

(後ろの男は何だ?)

(あの子のボディガードか?)

(ええっ、それだったら近づけないじゃねえか!)

などという会話をひそひそとしていたのであった  
そんなこんなでマスターの元に着いた

「マスターこの者が入りたいと言うのですが・・・」

「こやつは?」

「はい、ナツとグレイが外で喧嘩をしている時に空から降ってきて  
フェアリーテイルに入りたいと、それと彼女の名前は藍雷咲夜とい  
うそうです」

「そうだったか(なんで、空から降ってきたんじゃ?)」

「あのお」

「なんじゃ?」

「ここって入るのに条件とかあるんですか?」

「いや、ここは来る者拒まずじゃ!」

まあ、知ってるけどさ、いちおうね

「そうでしたか、よかったです」

「よかったですね、お嬢様^^」

「うん、そうだね」

「それとそこにおけるそやつはいつたい誰何じゃ?」

「あ、彼は私の執事のアキ・フユースという者です」

「初めまして、アキ・フユースです、一応お嬢様の義兄ということ

ですのぞ」

さて、マカロフ殿の反応はいかに

「ほう！ 咲夜の義兄だったのか。だが、何故執事なのだ？」

「元は執事とお嬢様の仲だったんですよ。でも、私のお願いで義兄になったんです」

「そうじゃったか、そうだ、おぬし、魔法は何をつかうんじゃ？」

お、来たか魔法の話し

「基本的に魔法は風の魔法と星の滅竜魔法です」

「なにつ、おぬし滅竜魔導士なのか！ しかも、星とは」

「なんだって？！ お前滅竜魔導士なのか！」

あ、ナツだしかも、あんな遠くでよく聞こえたな

「あ、うんそうだけど？」

「お前強いのか！」

「たぶん・・・」

「なら、俺と勝負しろっ！」

おいおいどこの戦闘狂気なんだ

バトルジャンキー

「そうじゃのう、力がどれくらいあるか確認しておきたいしのお」

「ちょ、マスター！」

「いいじゃないかやってみたまえ」

「エ、エルザさんまで・・・」

「がんばってくださいとお嬢様」

「ハア、しゃーないやるか」

そして、広場に出た

「ナツとやら、先攻後攻どっちがいいかね？」

「新人であるお前に先攻を譲ってやるよ！」

「そうか、じゃあ注意しとくよ」

「ん？注意だと？」

「そう、注意ね。僕が使うのは魔法だけとは限らない」

「な、なんだつて！」

「ああ、お嬢様は本気で勝ちに行こうとしてますね」

「そうなのかアキ！」

「ええ、エルザ様もよくご覧下さいね。お嬢様の能力をね」

「はじめえい！」

マカロフの合図で試合が始まったのであった

「んじゃ早速やるか、まあ、最初は普通に魔法でね」

パンツ シュンツシュンツシュンツ

咲夜が手を叩いた瞬間勢いよくいくつかの風の刃がナツに向けて飛んで行った

「おわっ、あつぶねえー」

「ありゃ、よけちゃったか、なら！」

パンツ バチバチ シャキン

咲夜は錬成で槍を作った

「槍を作っただと!？」

「おや、お嬢様はさっそく錬金術を使いましたか、ということとは・・・」

「ふんっ、槍なんかでどうなるってんだ！」

「第一イノセンス発動！」

シューインッ　ピカッ

第一イノセンスである喉の部分が勢いよく光を放った

そして、光が消えた時、咲夜の首には十字に光るイノセンスがあった

「な、なんだそれは？」

「ナツは知らないだろうね、これはこの世界に無いからさ」

「なんでこの世界に無いものをお前は持っているんだよ！」

「そんなの秘密に決まってるんだよ（笑）」

「音よメロディよ、この槍に纏い全てを絶つ刃となれ」

シユルルルルル　？　？　？　？　？

どこからともなく音が聞こえその音はどんどん槍に集まっていた

「さて、ナツこれは受けきれぬ（笑）？」

「やっつてやらあ！」

シューンシューンシューン　　ザシューッ

咲夜がすごい速さで槍を振り回しナツの腕に当たりナツの腕は負傷した

「うがっ！」

「ナツッ！」

「おいナツ！」

「「大丈夫か！」」

周りからはナツを心配するこえがする

「危ないですよ、マスター」

「何故じゃアキよ？」

「今はいつものお嬢様じゃないですね」

「どういうことじゃ」

「お嬢様は多重人格で、今は別のお嬢様が出てます」

「そうなのか！」

「このままでは、ナツさんが危険な目にあいますよ」

「うむ、わかった。では、やめえい！」

そして、アキの忠告により試合は終わりになった

だが、もう一人の咲夜は満足いつておらず

「な、マスターまだ終わっちゃいないぜ！」

「だが、お前さんとナツがこれ以上やったら周りにも被害が大き  
し、おぬしはナツを殺してしまうだろう」

「ちっ、ばれてたのかよ」

ザワザワ　　ザワザワザワ

今の発言を聞き周りは騒いだ

「しゃーねえ、戻してやるか、イノセンス発動停止」

シューイン　　ばたっ

そうして、イノセンスの発動が止まったと同時に咲夜は倒れた

「お嬢様！」

「咲夜！」

「新入り！」

「あ、これは寝ているだけのようです。お目覚めになれば会った時と同じお嬢様になるでしょう」

「そうか、よかったのぉ」

こうして、ナツと咲夜の試合は幕をひいた

咲夜は寝てしまった後、アキがあとの事をいろいろやり広場の修復や家を立てたりなど

いろいろやってフェアリーテイルへ入った証のスタンプなども勝手に決めて

押ししてもらっているのであった

「じつってフェアリーテイル? (後書き)

ふう、着きましたね。最初はフェアリーテイルの世界ですよ  
さて、このあとの咲夜がどうなるか好ご期待を!

誤字脱字はご了承ください

一週間たってる！？てか原作開始！（前書き）

咲夜「ちょっと、作者どうなってんのよ！修行とかは！」

作者「めんどくさいから省いた。でも、大丈夫、ちゃんと使えるから」

咲夜「それ、信用できないんだけど・・・」

作者「・・・さあLet GO!だよ」

咲夜「ちょ！作s・・・」

一週間たってる！？てか原作開始！

チュンチュンチュン シャッ

小鳥さえずる中カーテンを開ける音がした

「ふあゝ、アキおはよ〜」

「おはようございます。お嬢様、今日はもう原作開始日ですよ」

「ええええええ、嘘でしょ！！？」

「いいえ、嘘ではございません」

「やつぱゝ、修行してないや。でも、イメージトレーニングしてるからいいか！」

「さあ、お嬢様はやく朝食を食べてフェアリーテイルに行きましょ  
う」

「わかったわ！」

ガシャン ドタバタガタンッ ゴンッ いだっ！！

アキに着替えをまかせず自分で慌てながら着替え、机にぶつかりー  
の棚にあたりーのしながら  
急いでフェアリーテイルに行ったとさ

走って数分後・・・

あ、あそこにエルザがいる！

「エルザーーーー！！！！」

「おお！咲夜じゃないか！」

「一週間ぶり〜って、その持つてるのは何？」

「ああ、これか討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと装飾を施  
してくれたんだ」

「へえ、すごい大きい角だね！」  
「そうだろう、私も今回は大変だったよ」  
「私もS級試験通ったらエルザみたいな大きいの倒したいなあ」  
「咲夜みたいな者だったら、S級は合格できると思うぞ？」  
「ほんとおつ！じゃあ、がんばろうつと」

エルザに褒められた？咲夜はここでS級になることを決意した  
てか、アキ空気になってないっすか？  
そんなこんなで、話をしているうちにフェアリーテイルについたので  
あつた

サイドアウト

フェアリーテイル、ルーシーサイド

私ルーシー、はいつたばかりの新人です  
こうみえて星霊魔導士なのよ  
今日は家賃がやばいから仕事探さなきゃ  
すぐ近くでは、火竜サリマンダーと呼ばれているナツとパンツ一丁のグレイがい  
つものようにケンカをしています  
そんな時、

「大変だぁー！！！！」

急にロキが戻ってきて慌てていた

「エルザが咲夜とアキと一緒に帰ってきた！」

「！！！！ええええええええええええー！！！！」

「くくくくく、なんだつてえー！ー！？」「くくくくく」  
「うげっ！！？」

「さ、咲夜がきた、だと?!」

あれ、急にナツの態度が・・・つて震えだしてる!?

エルザさんは想像がつくけど、そんなに咲夜さんは怖いの？

それにしても、ギルドが騒然としてきたわね

つて、あれ？

「エルザさんと咲夜さんつて前にナツが言っていた？」

「今のフェアリーテイルでは最強女魔導士と最強最悪の女魔導士と  
言ってもいいと思うわ」

前にナツとグレイが言っていたけど。周りがこんなに怖がるってこ  
とは、よっぱど怖い人達なのかな？

すると、

ズシツズシツズシツズシツ

なんか、人とは思えない足音が聞こえるんだけど

「エルザだ・・・」

「エルザの足音だ・・・」

「やっぱり帰ってきたんだ・・・」

「このリアクション、やっぱりやっぱりエルザさんつてすごい魔導  
士なんだ!」

すると私の想像で巨人のイメージが出てきてしまった

「怖っ!?!つてあれ?」

私はふと思った。皆二人のことを怖がっているけど、私には咲夜さ

んの方は怖いと思えないくらいの年下だった

サイドアウト

はあよかったあ。ちょうどエルザが帰ってきた所で、これで逃してたら気まずい空気の中へ行くからね

それにしても、やっぱり皆エルザが怖いんだね（自分も怖がられていとわかっていない咲夜）

「今戻った。マスターは居られるか？」

「綺麗だなあ！」

「おかえり。マスターは定例会よ」

「そうか」

周りを見るとナツと 그레이が肩を組んでいた

なんで、あんな仲良しアピールすんのかわかんないわ？

しかも仲良しアピールなのが分からないエルザもよく分かんないw

あ、ルーシイとミラさんだ

ルーシイとは初対面だね、ミラさんは見たときあるだけ

それにしてもミラさん、情報だと昔は魔人と恐れられていたらしいけど、2年前の事件で妹のリサーナちゃんを亡くして以来、性格服装ともに一変してしまっただらしくて正直びっくりりよ凶暴な性格から天然系看板娘ってのもびっくりりけどすると、

「エルザさん・・・その馬鹿でかい角は何すか？」

あ、僕と同じ質問してるよw

「討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと装飾を施してくれてな  
…迷惑か？」

「……………いえ、滅相もございません！」「……………」

「あ、でもエルザそこに置いてちゃだめだよ」

「何故だ？」

「そこにあると通行の邪魔になるし、外に置いておこうね^^」

「ふむ、それもそうだな。すまなかつたな咲夜」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）  
（ ）

ここの注意発言で、皆の心は一つになった

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン！としてしまった

「旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルが、また問題ばかりを  
起こしているとな！マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ここでいつものエルザの説教が始まった……………と思いきや

「エルザ、たまには説教やめてあげなよお」

「む、だがしかしだな咲夜」

「毎回帰ってくるたびに説教なんてしてたら、皆ストレスで倒れち  
やうよお？」

「はっ、それもそうだな。なんで気づかなかつたんだ。私の失態だ  
！殴ってくれ！」



ルーシーが妙だと思つのも多分しようがない事だ

「ナツは昔、エルザにケンカをいどんで、ボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが!？」

うん、情報によると瞬殺だったようね

「グレイは裸で歩いている所を見つけて、ボコボコに」

「ロキはエルザを口説こうとして、ボッコボコ。自業自得だね」

「やつぱそーゆー人・・・」

その光景、想像できるね

「ちなみに、咲夜が怖がられるのはね」

え、僕って怖がられてんの？

「ルーシーちゃんが来る一週間前にナツが咲夜と試合をして、咲夜の多重人格の中の一人が出てきて、魔法やらイノセンス?とかいうのを使ってナツが腕を怪我してしまって、そこでやめになったの」

「ええ!あのナツが腕を怪我しちゃったの!？」

え、マジであの人出てきちゃったの?だから、試合は嫌だったんだよ。

しかもあの人ナツに怪我させてんのかよーったく、後で注意しないと

「それとね。そのときの別人咲夜がマスターにねあることを言われたの、しかもその咲夜の返答も驚きだったわ」

『このまま続けたらおぬしはナツを殺してしまうだろう?』  
『ちっ、ばれてたか』

えええ、あの人僕の体使つてあんなことまで言つてたの!?  
はあ、こりゃ〜やばいな

もう一人の自分について唸り悩む咲夜であつた

「うっそお!?あの子も私と同じ新人さんなのにそんなに怖いなんて!」

そんなことがあつたなんて・・・完全に嫌われたかも・・・そんなことをしている間にエルザが、原作に向けての話をし始めた

「ナツ、グレイ、それから咲夜。頼みたいことがある」

「えっ!?!」

「え、僕もなの?」

「仕事先でやつかない話を耳にした。本来ならマスターの判断を仰ぐところだが、早期解決が望ましいと私は判断した。三人の力を貸してほしい。付いて来てくれるな?」

「.....」

ナツとグレイは顔を見合わせた

「まあ、僕は問題ないよ〜。ね、アキ?」

「ああ、そうですね。それにしても、やっと登場ですか・・・」

「ああ、ごめんね。いろいろやつてて気づかなかつたわ」

「よろしいですよ。多分後半になるにつれて消えていく存在ですか  
ら(遠い目をしている)」

「ああああ、大丈夫だからね?だから、元気出してアキ!」

ああ、アキの元気がなくなっていく。どうしよあ！  
アキの様子に困り果てる咲夜であった

「どういう事だ？」

「あのエルザが自分から誘うなんて・・・」

「何事なんだ？」

周りがざわついた

「出発は明日だ。準備をしておけよ」

何故かナツとグレイは睨み合っていた  
そんな時にミラさんは、

「エルザとナツとグレイと咲夜、今まで想像した事無かったけど・・・

・・・

「えっ？」

「これって・・・フェアリーテイル、最強の（最悪の）チームかも・・・」

ミラさんがそう呟いたのを聞いた

「よし、こうなったら、早速準備しなきゃね！」

「そうでございますね。お嬢様急ぎましょう！」

そういうわけで僕とアキは即効で駆け出し準備の為にギルドを後に  
した

やっぱ女子は荷物が多くなるものでしょ？



一週間たってる！？てか原作開始！（後書き）

作者「なあ、咲夜ちゃんよお〜」

咲夜「作者僕の名前を気安く呼ぶな」

作者「ええ！ちよつとひどいよ。てか、この話完全に原作そってるよねえ〜」

咲夜「それは、作者が参考にするものがいけないんだってば」

作者「マジで！？そうか・・・しゃーない、別のもん参考にすつか」

咲夜「というわけで、始まったばかりですが、こんな作者をよろしくね」

作者「おれっちからもよろしくね〜」

## 最強チーム集合（前書き）

作者「ふむ。さっそく大変な気がしてきたね！」

咲夜「なーにーが、「大変な気がしてきたね！」なんだよ！」

作者「だってさ、チーム集合の時点でいろいろ危険じゃん？」

咲夜「なんか、いろいろ分からないけど。始めちゃおう」

作者「え、ちよっ咲夜さん?!」

咲夜「どうぞ、ご覧ください^^」

作者「ちよ、ほんと、まっt・・・」

## 最強チーム集合

ルーシーサイド

ただいま、マグノリア駅に居ます

そして、目の前でナツとグレイがいつもの様にケンカをしています  
ミラさんに二人のケンカを止めてあげてと言われて来ていますが、  
二人のケンカを止めるなんて私にはとうていできません

「なんで、テメーなんかと一緒になんだよ」

「俺が知るかよ。エルザの助けなんて俺だけで十分なんだよ」

「じゃあお前だけで行けよ！俺は行きたくねえ！！」

「じゃあ来んなよ！後でエルザに殴られる！！」

どどんケンカがヒートアップしてなか止めるなんて、できるわけ  
ない・・・ごめんなさいミラさん

「すまない・・・待たせたか？」

やっとエルザさんが来た。そう思い振り返ると

「荷物多っ！？」

思わずつつこみを入れてしまった

ナツとグレイは、エルザが来たとたんすぐさま肩を組んで仲良しア  
ピールする

また、ナツはハッピー化していた

サイドアウト

マグノリア駅構内

やっばい、やばすぎるわ。なんでこんな日にかぎって寝坊なのよ！

ただいまの、僕はマグノリア駅構内を走っている

せつかく、原作の開始で皆集まってる時なのに、寝坊だなんて！アキは情報収集で先に行かせてるし

全速力で家から走ってきていた。そして、前方を見ると大きな荷物があった

もうすぐで当たるところで僕はブレーキをかけた……だが、

「あ、やばい！止まらない!？」

キーーーーズルツ　ドカンツ

結局止まれなくてエルザの荷物に突っ込んでしまった  
すると、エルザ達の声が聞こえた

「な、なんだ今のは？」

「ちよ、エルザさん！咲夜が荷物にはまってますよ!？」

「なんだと！早く助けるんだ!」

さっきの突っ込みのおかげでエルザ達に気づいてもらえて、助かった  
そして、僕達は話始めた

「ふう、ん？君は確かフェアリーテイルに居たな」

「新人のルーシィです。ミラさんに同行するように言われて来ました。よろしくお願いします」

「私はエルザだ」

「僕は咲夜だよ。すきに呼んでいいからね」

僕も一応自己紹介をした

「ん？咲夜、今日はアキは来ないのか？」

「ああ、アキね。彼には先に行つて情報収集してもらつてる」

「ほう。仕事がはやいな」

「一応、僕は情報屋が本職なんで・・・（小声で言う）」

「え？アキつて誰なんですか？」

「あ！そつか、ルーシイはまだアキに会つた事無いもんね」

「で、誰なの？」

「アキは僕の執事なんだよお」

「ええっ！？咲夜つてお嬢様なの！？」

なんで、あんなに反応するんだ？ルーシイだつて確かお嬢様なのに

・

「それにしても、君がルーシイか？（チラツ）」「あゝいゝさ」  
傭兵ゴリラを小指一本で倒したというのは君の事か。「はあっ！？」

「

「違うよエルザ。情報によるとオカマつぱいゴリラを・・・ブ  
フツ・・・お得意の星霊で・・・倒したんだつてさ」

「（補正ありがとう咲夜。でも、なぜそこで笑う！しかも倒したの  
ナツだし！）」

「あと、貴族の屋敷に潜入捜査した時に、セクハラされて屋敷を全  
壊させたつていうし「え、っ！？」」

「それ程とは、力になつてくれるならありがたい。よろしく頼む（  
チラツ）」「あゝいゝさ」

「コ、コチラコソ（色々と誤解だしね！？）」

ありや、震えてるね。原作知識で知ってるけど。誰にも教えてもらえなかったから、知らないって言ったのだけど苛めすぎた？  
ルーシィとの挨拶はこれくらいにして

「エルザ！付き合ってもいいが条件がある！」

「なんだ？言ってみろ」

「帰ってきたら、俺と勝負しろ！！」

「「ええっ！？」」

ルーシィとハッピーが驚いた

「おい早まるな、死ぬ気か！？」

「前にやりあった時とは違う！今の俺なら・・・お前に勝てる！それとお前もだ、咲夜！絶対に勝ってやる！」

えゝ僕もなの？またあの人出ちゃうよ

「ふっ・・・確かにお前は成長した。私はいささか自信がないが・・・良いだろう、受けてたっ！だろ、咲夜？」

「はあく、僕本人はいいけどさ。またあの人が出てきちゃうのが不安だな。」

「まあ、大丈夫だろう。ナツは頑丈だからな」

「そだね。グレイもついでにやっとか？」

「いや、やめとく。エルザに勝てる気しないし咲夜とやったら死にそう・・・」

さすがにあれを見たから遠慮したみたいだ

「うおゝ！！燃えてきたゝ！！」



グレイは見えないフリをした  
ルーシイはビツクリしていた  
エルザすげえ！、と関心している咲夜

「エルザそろそろ教えてよ。僕達なにすればいいのさ？」

鉄の森の事アイゼンヴァルトで簡単な説明をしたエルザ

ララバイのことも話していた。ララバイと言う詳細不明の魔法で何かを企んでいるとのことだ

それを阻止するために、今回のメンツが集まった

当然だが、エルザでも闇ギルド一つは厳しい  
要約するとこんなとこだ

あ、でも僕はがんばればできるかな？

話が区切られて、駅で昼御飯を買いに出た

ご飯を食べながらの会話中

「そういえば、ナツ以外の魔法は見たことがないわ」

「エルザの魔法は綺麗だよ。血がいつぱい出るんだ、相手の」

「それって綺麗なの？」

僕も同感だよルーシイ。ハッピーそれは綺麗だとは言わないと思うよ

「咲夜の魔法はすごいんだよ！僕らの知らない魔法を使うんだ！」

「ハッピー達の知らない魔法って、どんなのよ……」

ルーシイ、僕が危険な魔法を使うとでも思っているのか？

でもまあ、あれだけは教えとくか



「あれ？ナツは？」

「「「えっ!?!?」「」」

気づいた頃にはもう列車は、遠くなっていた  
グレイとルーシィは啞然としていた

「話に夢中で忘れていた。何と言う事だ、あいつは乗り物に弱いというのに、私の過失だ。とりあえず私を殴ってくれないか！」

エルザって違う意味でまじめだね。それにしてもどうしようか？  
そんな風に悩んでいたら遠くにアキが見えた。そうだアキに頼んで  
おこう！

そんなことをしているとエルザが緊急レバーを引いて、列車を止めてしまった

「仲間のためだ。解ってほしい」

「無茶言わないで下さい」

「私達の荷物をホテルまで頼む！」

「いやっ、なんで私が!?!?」

見知らぬ人に荷物預けたらだめだよエルザ・・・

「フェアリーテイルの人達って、やっぱりこうゆう感じなのね・・・」

否定できかねません・・・

「俺はまともだぞ」

グレイ・・・半裸で言っても説得力ないよ。「だから服は!?!」ほらね

「よし、魔道四輪で追いかけるぞ!」

「あゝ、エルザ大丈夫だと思うよゝ」

「何故だ咲夜?」

「さっきアキ見つけたから、助けに行くよう頼んだ」

「だが、電車に追いつく事なんてできるはずが無い!」

「それができるんだなあ。だってアキは普通じゃないもの(聞こえるか聞こえないかの声で言う)」

「できるのか!?!そうか。だが、心配だから行くだけ行こう!」

こうして、僕達は結局行くことにした

サイドアウト

列車内アキサイド

ふう、どうも皆様。執事のアキでございます

たった今列車に追いつき乗り込んだ所でございます

お嬢様にナツさんをお助けするよう命じられましたが、ナツさんは・・・あ、居ました

そこで、ナツを見つけたアキだったがナツは戦闘中のようだった

「ナツさん、お迎えに来ましたよ!」

「ア、アキ・・・うっぷ・・・」

「誰だお前は？」

「あなたこそ誰なんですか？私はナツさんを迎えに来ただけですの  
で」

「俺は鉄の森の一人だ！」

はて？鉄の森とは何でしたかね？聞いたときがあると思いますが・  
・（アキも意外と忘れっぽいのであった）

「まあ、どうでもいいですね。ナツさん皆さんが心配しているので  
行きますよ」

「あゝいゝゝゝゝ」

そして、私はナツさんを持って窓から飛び降りようとしたら、

「ちょっと待て！八工野郎、俺達鉄の森に手を出したこと後悔しや  
がれ！この先の駅で俺達は待っているからな！」

「あっそうですか」

そう吐き捨てて、窓から飛び降りた。すると後ろの方からお嬢様達  
の乗った魔道四輪がやってきた。

それに気づいた私は、屋根にいたグレイさんとぶつかりそうになっ  
たのでナツさんを放して、屋根に着地した

サイドアウト

数分後、僕達は列車に追いついた

すると、窓からナツを持ったアキが出てきた

しかしアキはグレイにぶつかると思ったようで、ナツを放して自分

は助かっていた  
そしてナツはグレイとぶつかった

ゴンッ！！！

「「うぎゃあああああああ！！！！」」

あ、ナツとグレイがぶつかって落ちて・・・え？

「ちよつ、ストップ！エルザストップだよ！」

そうして落ちた二人の元へ集まった

「ナツさん無事ですか？」

「・・・あゝいゝ」

あ、無事？のようだ

「よくも、置いていったな！」

「ごめんね。ナツの存在忘れてたからさ」

あんな風にぶつかったのによく無傷だね

「無事でなによりだ」

エルザはナツを自分に引き寄せた

「いだっ！？」

鎧をしているから当然なぐらい、ガツンと音がした。エルザはいい

人なんだけどね（苦笑）

「まったく。無事ではありませんでしたよ」

「え？アキ列車内で何かあったの？」

「確か、鉄の森とかいう人でしたよ」

「ばか者ー！ー！ー！」

「ゴフツ！！？」

そっぴいなながらエルザはナツを殴っていた  
うわあ、いつ見てもすごいね！

「鉄の森は私達の追っている奴らだぞ。何故みすみす逃した！！」

「そんな、話しらねえよ！？」

「さっき話しただろう！人の話はちゃんと聞けっ！！」

ブフツ・・・見てて笑えるねこの二人（笑）

「てか、それには無理があるよエルザ。気絶してたんだから（笑）」

僕は笑いながらつつこんだ

「そうだったな・・・すまんナツ」

「って、おい！俺殴られ損じゃねーか！」

どんまいナツb（^^）

「そっぴえば。アキ、ナツその人特徴とかなかった？」

「特徴だあ？」

「そうですね。特徴はありませんでしたが、妙な三つ目のドクロ  
のような笛を持っていましたよ？」

「三つ目のドクロ？」

思い出したフリするか

「あっ！そうか！」

「どうしたんだ咲夜！？」

「聞いたときあるから思い出してたけど、わかったんだよ！あれは死の魔法、呪歌の道具だよ！」

「なにっ！？」

「その話、知ってる！」

「それはどうゆう物なんだ咲夜？」

「禁忌魔法の一つに、呪殺というのがあるのだけれど、ララバイはもっと恐ろしくて笛の音を聴くだけで死ぬと言われているわ」

「……なっ！！？」「」「」

「ついた名が、集団呪殺魔法ララバイ！」

ものすごく危険だと言いついてる言い方をする咲夜

「集団……」

「呪殺魔法……」

「そんなもんが町の中で吹いちまったら……」

「確実に死にますね……」

「冗談ではない！鉄の森の奴らそんな物持ち出したら、何するかわからん！直ぐに乗れ、追いかけるぞ！」

僕にはどうなるかわかるけどね

サイドアウト

## 最強チーム集合（後書き）

作者「ふう、危険な展開になってきたね！」

咲夜「ねえ、作者。このあと僕はどうなるの？」

作者「え、今教えたら意味無いじゃん」

咲夜「それも、そうだね。んじゃ皆様。つまらないと思いますが、コメントお願いいたします」

作者「いろんな意味でお願いします！」

妖精は魔法壁の中（前書き）

作者「咲夜ちゃんオレツチすごい！」

咲夜「何が？」

作者「飽きっぽいオレツチが続いてる！」

咲夜「そうですかー（感情0）」

作者「えっ、ちょっ、ひどくね!？」

咲夜「まあ、この調子でがんばる（と思う・・・）作者ですので

作者「温かく見守ってくださいえ！」

## 妖精は魔法壁の中

クローバーの町 定例会会場 マカロフサイド

「マカロフちゃん。アンタんとこの魔導士ちゃんは、元気があつていいわあ〜」

フェアリーテイルのマスター・マカロフに話しかけているのは青い<sup>ベガサス</sup>天馬のマスター・ボブだ。マスター・ボブの服に何故羽がはえているのかは本人しか知らない事であろう。そして名前からして“男”である

「聞いたわよ〜。どっかの権力者を、コテンパンにしちゃったとか?」

「おお！新入りのルーシイじゃな？あいつはええぞあ、モチモチボヨヨ〜ンじゃ!」

「きゃ〜、エッチ〜」

マカロフのセクハラ発言に恥ずかしがるボブ

「笑ってる場合かあ〜、マカロフよあ」

「ん?」

声の主は正規ギルドの一つ、四<sup>クラ</sup>つ首<sup>トロ</sup>の番犬<sup>ケルベロス</sup>のマスター・ゴールドマインである

「元気があるのはいいが、テメエんとはやりすぎなんだよ。評議員の中には、いつかフェアリーテイルが町一つ潰すんじゃないかって、心配している奴もいるらしいぞ」



「実はマスターがいない間に、とってもステキな事がありました」  
「ほお」

この後、ミラが笑顔でとんでもない事を言ってきた

「なんと、エルザが、あの咲夜とナツとグレイがチームを組んだんです。これって、フェアリーテイル最強チームかと思うんです。一応、ご報告しておこうと思って、お手紙しました」

「・・・・・・なっ、なっ、なっ！！？」

「それでは」

ミラはニツコリ笑って、映像が途切れた

「あらあら」

「心配事が現実になりそうだなあ、オイ」

バタツと倒れるマカロフ

「（なんて事じゃ、奴らなら本当に町一つ潰したり、重体者を出しかねん。定例会は今日終わるし、明日には帰れるが、それまで何も起こらずにいてくれえっ！頼むう！！）」

マカロフの心の叫びが響いた

サイドアウト

クヌギ駅 崖の上

クヌギ駅で騒ぎがあったようね。どうやらあいつらに列車を乗っ取られたらしい

「馬車や船なら分かるけど、列車を乗っ取るなんて・・・」

「あい、レールの上しか走れないし、あんまりメリット無いよね」

「だが、スピードはある」

「列車を乗っ取るほどだし、何か急いでるみたいだね」

「俺もそう思うな」

僕の意見に同意するグレイ、てか「何故脱ぐ!?!」・・・僕が言おうとしたのに言わないでよルーシィ

「まあ、軍隊も動いていることですし、捕まるのは時間の問題では?」

「そうだといいけどねぇ・・・」

そう言っつて次の駅へ向かった

ナツはいつものようにダウンしていた

僕は揺れのせいで頭を打ち気絶しました

オシバナ駅前

エルザに殴り起こされた。えっ、なんで殴られたかって?

なんか、僕は普通に起こしても起きないらしい

そんなこんなで情報確認してみると、脱線事故と言っているが、実は占拠されたようだ

すると、エルザが駅員の人に訪ねていた

「君、駅内なかの様子は？」

「ん？なんだね君h「ガンツ！」グウオ！？」

埒があかないと判断したのか、駅員に頭突きをかますエルザ  
これを素でやってるから怖い・・・  
見なかったことにしよう

だから、今聞こえてくる悲鳴みたいなのはただの幻聴にすぎない！

アイゼンザルト  
「鉄の森は中だ！」

「おう！」

「よっしゃー！」

「てか、これあたしの役目！？」

ナツの事はスルーしました。僕達はオシバナ駅内に向かった  
ホームへ向かう途中に、軍の兵が全滅していたが今は無視して前に  
進む

「やはり来たな、フェアリーテイルの八エ共」

鉄の森が待ち受けていた

「貴様！貴様がエリゴールだな？」

はあ、もうすぐ戦闘になるのかあ。嫌だなあくめんどいし（笑）

「八エがあ！お前らの所為で、俺はエリゴールさんに・・・」

「（ん？この声は、どこかで聞いたような・・・？）」

「エリゴール、貴様等の目的はなんだ？ララバイで何をしようとして  
いる！」

情報あるから僕はわかるけどね

「分からねえのか？ 駅には何かがある？」

エリゴールは空中に飛んだ

「飛んだ！？」

「風の魔法だ！ でも、咲夜も使えるよ！」

そしてエリゴールは拡声器の上に降りた

「集団無差別呪殺をする気が！」

「違うよエルザ！ これは、集団道連れ自殺だよ。聞けば死んでしま  
う呪殺魔法を響かせる場所に集まって、道連れ自殺を図かるうなん  
て、何を考えているんだ！」

(((((え???)))

「なっ、そうだったのか！ エリゴール！ 自殺なんてせず、生きて罪  
をつぐなえ！」

「そうですエリゴールさん！ 罪を償えば、明るい未来が待ってるは  
ずなんですから！。自暴自棄にならずに、ポジティブに生きるんで  
すよー！」

アキとエルザが暴走しながら説得しようとしているが、何言っ  
てんのこいつ等？

みたいな顔をしている

後ろの仲間や敵の皆まで、黙っている

「あれ？何でしょうかこの疎外感・・・私達なにか外したようですね」

さーてと、そろそろ疑問を言いますかあゝ

すると、列車の時と同じような影が襲ってきたが、復活したナツが防いだ

「てめえ！？」

「その声・・・やっぱりお前か！」

「ナイス復活！」

「そうだ。思い出しました！列車の中で会った人ですよ」

「アキは今頃かいつ！？」

「おー、なんかいつぱい居るじゃねえーか！」

「敵よ敵、みーんな敵だから！」

「へっ、面白そーじゃねーか！」

ナツが戦闘態勢に入った

「エリゴール？って人さあ」

「ああ？」

「ララバイ放送するのに、部下いちゃ駄目やないの？ええ？どうなんだい？」

エリゴールが焦った顔をした

「どういう意味だ咲夜？」

グレイが疑問に思ったように聞いてきた

「だつてさ。ララバイ聞くと死んじゃうのなら、部下達も聞いてしまえば生き残るのはエリゴールだけになるでしょう?」

「『『『あつ!?!』』』」

「??!」

ナツだけは気づいていないようだ

「(な、なんだこいつは!?!俺の目的がこの町じゃねえ事に気付きやがったのか!?!)」

咲夜の推測に、エリゴールは驚いていた。

「(このままではバレる可能性が…、こいつを先に片付けねえと!)」

「それにこの先にはクロバーで、定例会場があるよ…。」

「ちっ…お前らやっちまえ!」

エリゴールは逃げていった

「こっちはフェアリーテイル最強チームよ。覚悟しなさい!」

「ナツ、グレイ…二人で奴を追うんだ!」

後を、二人ほど追いかけていったが、あの二人なら大丈夫だろう  
ナツとグレイは文句を垂れていたけどエルザに一喝されてハッピー  
化しながら走っていった

「お嬢様、私も皆様についていき情報を集めて参りませうか?」

「ん、いいや。どうせケンカしかしてなさそうな気がするからw」

「わかりました。では、ここで観戦でもしています」

「よしっ、さくつと行きますかあ〜」

向こうの奴らは人数で勝てると思っっているようで、八工共を捻り潰してやるとか言ってる

「下劣な、これ以上フェアリーテイルを侮辱してみろ！貴様達の明日は保障できんぞ！」

「エルザ、僕からすると保障はもうできてないよ・・・」

エルザが剣を出す

「エルザ僕にも半分頂戴ね。あの人がつずいてるみたいだからさ^^」

「分かった。だが間違えても重傷者を出すなよ！」

「あゝ、うん。がんばってみるね！」

剣を持ち、飛び出すと敵側も剣を持って襲ってくる。エルザは斧や双剣に武器を換装で変えながら、吹き飛ばしていく

「くそっ！遠距離攻撃でもくらえ！」

「エルザ！」

僕は前に出て一閃で相手の魔法を断ち切った

「断ち切ったあー!!!?」

「第3イノセンス発動！」

そして僕は第3イノセンスの刀「醜鬼」しじゆいを発動して敵陣に突っ込んで叩きのめしていく

「あれって魔法!？」

「いいえ。あれは魔法ではなくイノセンスという神に与えられた能力の物体を具現化された物です」

「何それ!？」

「この世界の方々は誰も知らないでしょうね」

「ええっ!？」

アキは咲夜の事を言った

そうこうしている内に、エルザは槍、双剣、斧と次々換装していった

「二人ともすごいわ!？」

「でも、エルザと咲夜のすごい所はこれからだよ」

「エルザ?咲夜?」

鉄の森幹部の、カラツカが疑問に思った

「しかし、まだこんなに居るのか・・・面倒だ、一掃する!」

「エルザ半分だからね」

「分かっている。換装!」

エルザの体が光り輝き、鎧が分解されていく

「おおっ、なんか鎧が剥がれてく!」

ケダモノやん、あんた達よ・・・

「魔法剣士は通常、武器を換装しながら戦う」

「ですがエルザさんは、自分の能力を高める魔法の鎧も換装しながら戦う事ができるんです!」

「それが、エルザの魔法・・・」

「その名は……」  
「ザ・ナイト騎士!!」

アキとハッピーが交互に説明していき、エルザは魔法の鎧、天輪の鎧に換装した

「舞え、剣達よ!」

エルザの周りに、多くの剣が現れた

「エルザア!? こいつまさか!？」  
「サイクルソード循環の剣!」

回転する多数の剣吹き飛ばされる鉄の森

「すごつ!?! 一撃で半分も全滅!?! ……でもちよつと惚れそう!」  
「後はまかせる」

「ああ、やってやらあ(笑)」

エルザは、元の鎧に戻った後、咲夜にバトンタッチした

「この野郎オー!」

「よくもやりやがったなー!」

「さあ、雑魚共さんよお、俺が今綺麗に消し去ってやるからな(笑)」

「人格が変わった!?! まさかこいつ!?!」

またカラツカは気づいた

「さてと……」



ビードは突っ込んで来た

「あははは、可愛いそうだからやり方変えてやるよ。イノセンス発動停止……」

「まったく、やりすぎだよ。致死武器！」スカーデッド

「ウガアーーーーー！！！！」

すると、突然ビードの古傷が開き、痛みで叫びだした。そして、周りの残っていた奴らも叫んでいた  
鉄の森の一人が、

「間違いねえ……こいつらフェアリーテイル最強最悪のコンビ……」

よく致死武器受けて喋れるね？

戦闘中にどうでもいい事をのんきに考えていた咲夜

「妖精女王のエルザと多重人格の魔王咲夜だ！」テイターニア  
たじゅうじんかく  
サタン

「すごーい！」

「相手が悪すぎる！」

カラツカは一目散に逃げていった。他の奴らは気絶している  
僕はエルザを先に向かわせて、オシバナ駅の修復をしてから行く事にした

やらなきや、なんか危険な気がするし……

「それにしても、直しても直しても穴があるのは何故？」

「誰かが直した所を、また壊しているのでは？」

そう、今僕は駅を直しているのだが、直しても何故か次にはもう穴が開いている

めんどくさいから、歩きながら直して回っていた  
目的地にいたら、ナツが盛大に壁を壊す瞬間だった

やっぱりナツが原因だったのか・・・

エルザは、血を流し気絶中の男に追い打ちをかけている。

グレイは、内心穏やかとは言えなそうな顔をしている。

ルーシイは、茫然として暗い顔をしている。

「何この状況、ちょっと居たくないんだけど」

とりあえず、事情を聞き魔法壁のあるところまで行った

「うおおーすげっ。竜巻の中に居るみたいだね」

「そうですね。お嬢様はこういうものが好きですものね^^」

「のんきな話をしていないで、咲夜はこれをどうにかできないのか？」

「僕なりの方法は二つ、地面の下を通るか、オールフイクション大嘘つきで無かった事にするかね」

地面の下ってよごれるから嫌だし、大嘘つきはへたすりゃ、建物全部消えるからなあ

「地面の下を通る？あっ！」

ハッピーが叫んだと思ったら、星霊の鍵をルーシイに渡した

能力による穴掘りで、魔風壁の下から抜け出す作戦を提案してきた。

ナツは、カゲヤマも外に連れ出そうとしている。ナツ優しいよ流石

主人公。

ルーシイの星霊のバルゴによって脱出した。外は魔法壁の風が凄かった

「先を急ごか」

「そうだね。急ごっか」

エルザに同意するように答えた

「無理だな。今からじゃ間に合わない・・・俺達の勝ちだよ」

傷ついた体で、勝利宣言した

敵だけどもんどくさいから大嘘つきで直した。だが、逃げられると困るんで魂を半分憑依させて

僕がカゲヤマの体の主導権を握っている

「ナツはどこいった？」

シリアスになっていたら、ナツがいなくなっていた

ハッピーもないから、ついに行っただろう。なら、ラスボスを主人公が倒して終わりか

今回の事件も終わりに近づいたのか。って、やばい、エリゴールで遊ぼうと思ったのに！？

急いで行かなきゃ！

こうして、エリゴールで遊ぶことを思い出した咲夜は、アキをつれて急いで追いかけたのでした



妖精は魔法壁の中（後書き）

作者「次回ララバイとの戦闘です」

咲夜「ララバイは強いのかな（笑）？」

作者「咲夜さんもしかして・・・あの人が!？」

咲夜「作者、ちよっとの間黙っとけよ（笑）」

ズシヤツ

作者「ギヤアアアアアア・・・バタツ」

咲夜「あれ?いつのまに作者が!？」

・・・・・・

咲夜「まあ、作者のぶんも・・・次回もよろしくお願いしますね  
^  
」

## エリゴールは変人？（前書き）

作者「すごい、ララバイ編まで来てもうた（ノく。）」「

咲夜「ほんとビックリだね。作者がここまで出来るとは・・・」

作者「なんか信じられないって顔してるね？」

咲夜「はあ、当たり前じゃん。では、ララバイ編です」

作者「どうぞ、ご覧ください！」

## エリゴールは変人？

クローバー大峡谷 クローバー町目の前

「もう少しでクローバーの町だ。待っている、ギルドマスターのじじいども！死神がばーいたぁー！えいっ！」何っ！？アベシッ！！」

エリゴールが咄嗟に後ろを向き、走りながら投げてきた咲夜の石が綺麗に眉間に当たった

「やっと追いついた、エリエール！」

「エリゴールだ！！！」

お約束をしたので、バトルパートと行きますか！

「何故、貴様がここに居る？」

「エリーで遊ぼうと思って（> <）だ」

「だから、俺はエリゴールだ！！！」

またしても、お約束

「こいよ。その笛もお前も使えなくしてやる！」

（魔法壁は・・・カゲヤマどもはどうした・・・あと少しでじじいどもの居る場所につくの・・・！！）

考えてるの丸見えだよ。一応ぼくはテレパシー持ってるから見え見え

「魔法壁は壊させてもらったよ。いろいろ邪魔だったしね？もしやるならこれくらいやらなきゃ・・・」

僕は手の平に魔王印のMの文字を書いて、前にやったときより強く手を叩く

「これくらいやんなきゃねー！！！！！！」

そして、カマイタチのような刃が咲夜の後ろから数えきれないくらい飛んでいった

「ぬぁ！？」

エリゴールは数百m上空まで飛んだ

「そのまま上から逃げないでよ？」

僕は一瞬でエリゴールの目の前まで上がる

「何っ！？」

そして錬金術で作った、切れない鎌が上下についた物を叩きつけた

「ぐおおー！」

そのまま一気に落ちて行つたので、僕もそれを追い地面に降り立つ  
エリゴールも風で勢いを弱め降り立った

(こいつ、一体なにものなんだ！？)

「お前の仲間は多重人格の魔王って呼んでたけど？」

僕はそう言い放った瞬間、遠かったので黒神ファントムを使いエリゴールの目の前まで行き、致死武器でエリゴールの腹のあたりの古傷を開いた

「がああ!!！」

そのまま100m近くほど吹っ飛んだ

「くそつ! ストームスプリンガー暴風波!!！」

「効かないよつ!!！」

僕はエリゴールの技に大嘘つきを使った

「何っ!?!」

抹消

あの人をだせばすぐだが、遊びたいので出さない

「くそつ!!！」

エリゴールはストームメール暴風衣を纏う

ものすごい暴風が流れてくるが何の支障もない

「死ねえ!!！」

大量のカマイタチを放つ

「おお、危ないよ〜これじゃあ避けきれないよお」

そういいながら、大嘘つきでどんどん消していく

「避けてねえが消してんじやねえか!」

つつこまないでエリゴール

僕は殺さない程度に、致死武器を調節して古傷を開いた

「がはっ!」

エリゴールの暴風衣が解ける

「もう、飽きてきちゃった・・・」

僕は飽きてきたので第2イノセンスを発動した

「なんだこの光は?」

やっぱりこの世界には無いからエリゴールも不思議なんだね

そして、エリゴールの目を右の片目だけで5秒間見つめると突然エリゴールが叫んだ

「な、何故だ!?!体がうごかねえ!?!」

そう、今やったのは固定。第2イノセンスである両目のうちの右だけで見つめ続けると、固定されてしまう力である

「エリゴール皆来るまで、変な格好で待ってな」

「なっ！？おいつ早くこれを解きやがれ！」

エリゴールの叫びを聞いていると、後ろから誰かに呼ばれた

「「咲夜！！」」

振り向くと先に来ていたはずのナツとハッピーがいた

「あれ？二人とも先に来てたんじゃなかったの？」

「それがよー、なんかの匂いで妨害されてあいつの匂いわかんなくてよお」

「あい、そのせいで僕ら迷っちゃって、今ついたところです！」

「ああ、どんまい。エリゴールは僕が遊んで片付けたよ。そこに変な格好で固まってるけど」

そして、ナツとハッピーはおお！といいながら、固まっているエリゴールを叩いている

「本当にお嬢様はお遊びが好きでございますね」

「あ、アキ。あなたなんでしょう？ナツ達の妨害をしたのわ」

「ええ。それに止めて置かないと、お嬢様の遊ぶ時間が無くなってしまうでしょう？」

「それもそうだけど、一応主人公？なんだからさ。来るだけ来なきや駄目じゃん」

「それは・・・失礼いたしました・・・」

謝るくらいなら、もうちょっと派手にやろつよ。って、考える事違うかw

そんな他愛も無い話をしていると、後ろから魔道四輪がやってきた

「遅かったね。もう終わっちゃったよお」

「そこに固まっているのはエリゴールか？」

変な格好で固まっていたエリゴールを不思議をそうに見つめるエルザ

「僕の能力で固定したの」

「って、なんで固定？」

「誰もが思っていると思うが、僕はめんどくさがりだ！なので、めんどかった！」

「そんなの知らないしっ！？てか、エリゴール悲惨・・・」

見るとさっきまでハッピーと叩いていたナツが、グレイと爆笑していた

動けないから泣き出した

「プッフ、エリー悲惨・・・プッフ」

と、笑いながら言ったらブチッ！エリーじゃねえ！！という声がテレパシーを使って伝わってきた  
キレながらつつこんできた

カゲヤマもエリゴールの姿を見て爆笑していた

「少し可哀相な気がしてきた・・・」

エルザがエリゴールに同情し始めた

「大丈夫だよ。これはリミッター付きで、評議員が触ったら解けるようになっているから」

「そ、そうなのか・・・（咲夜は時々黒く見えるぞ！？?）」

「とうわけで、評議院に送りつけるか！」

「それはおもしろいですね」

「いい案だな」

これはアキとグレイ

「あい、おもしろそうです！」

ハッピーも賛同

皆ノリいいね

とか考えているとカゲヤマがララバイを持って逃げ出した

「笛はココだぁー！ざまあ見る！！」

そのまま魔道四輪に乗ってクローバーの方へ走り去っていった

「助けてあげたのに逃げるとか、めっちゃありえんていなんですけど！！」

「いえ、お嬢様は何もしていませんよ」

「それに、ありえんていつて何よ？」

アキとルーシイにつっこまれた・・・というかルーシイなんか久しぶりな気が？

「とりあえず追っぞ」

エルザに言われて僕達は追いかけた

サイドアウト

## エリゴールは変人？（後書き）

作者「ララバイに行くはずだったのに・・・」

咲夜「大丈夫よ。もう一つ更新するからね！」

作者「あ、そうだった。では、もう一つ更新しますので！」

咲夜「ぜひ、見てくださいね^^」

## 決闘ララバイ！（前書き）

作者「今度こそ、ララバイとの決闘だーい！」

咲夜「作者は、そんなにララバイ編が好きかい？」

作者「うん大好き。だってララバイが馬鹿っぽいから」

咲夜「でも、原作どおりなのかね？」

作者「えっ・・・？」

決闘ララバイ！

クローバー町 定例会会場の近く

クローバーに着き、急いでカゲを探すとマスターと向かい合っていた他の皆が行こうとするフルと青い天馬のマスター・ボブが「今いい所だから黙って見てなさい」と止められたカゲとマスターの会話が聞こえる

「どうした？早くせんか」

「・・・」

どうやらカゲは迷っているようだ

笛を吹くことに

「さあ」

エルザが止めに行こうとするが止められる

「・・・！」

（吹けば・・・吹けばいいだけだ！！）

受信感度でカゲの考えてる事が聞こえる

（それで全てが変わる！！）

「何も変わらんよ」

マスターがカゲの心境を見透かすように言う

「さすがだな・・・」

俺は聞こえないよう小さく呟く

カゲが動揺する

「なにも変わらんよ」

「!?!」

「弱い人間は、いつまで経っても弱いまま。しかし、その全てが悪では無い！元々人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある！仲間がいる！強く生きる為に寄り添い合って歩いていく、不器用の者は人より多くの壁にぶつかると、遠回りをするかもしれない。しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らずともな！」

一応、このシーンについては、原作知識があるから知ってたけど、泣けるねb( ; ; )

見るとアキの担いでいる変人が涙を流していた  
カゲが笛を落とす  
そして、

「参りました」

負けを認め頭を下げた

その途端エルザにナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーが一斉に飛び出す

「ぬおおおおー!!お前ら何故ここに!!!?」

「さすがです!今の言葉目頭が熱くなりました!」

エルザがマスターを抱く

だが鎧をしているから

「いだっ!!」

というようになるわけで

ナツがほめながらマスターの頭をペチペチたたく

青い天馬のマスターはカゲをなんか可愛いと言っている

「は〜い、マスター」

僕はマスターに話しかける

「おお、咲夜か。そして、アキも来ておったか。」

「マスター、お土産ですよ^^」

そして、アキがマスターの前にエリゴールと言う名の変人を置いた

「咲夜、アキ、この変な格好をしているのは一体なんじゃ?」

「エリゴールと言う名の変人ですよ」

「エリゴール?あ、ほんとじゃ・・・しかも泣いておるし」

「さっきのマスターの言葉に感動しちゃったみたいで」

とか話していると突然ララバイから煙が上がる

僕はいったんエリゴールを置いた

「ごめんアキ。これ評議院に送りつけておいて」  
「わかりました。では・・・」

とりあえず、アキにまかせておく  
そして、振り返った瞬間

『ドイツモコイツモ、根性ノネエ魔導士ダナア!』

「「「「「「「「「「「「「「「「」

「なんか出た!?!」

皆ララバイから出てきたものに驚いた

『モウ、我慢出来ン!ワシガ自ラ喰ラツテヤロウ!』

ララバイが、巨大な化け物へと正体を明かした。

つかやっぱ、知っているのと実物を見るとじゃ全然違うな。

『貴様ラノ、魂ヲナア!』

「デカ過ぎー!?!」

「そこ突っ込むの!?!」

どうでもいいでしょそこは!

「何だこいつは!?!こ、こんなの知らないぞ!?!」

「あゝら大変」

「こいつは、ゼレフ書の悪魔だ!」

会場にいたギルドマスター達は、非難して行った。

「なんで笛から怪物が!？」

「あの怪物がララバイそのものなのさ!つまり、生きた魔法!それが、ゼレフの魔法!」

「生きた魔法?」

「ゼレフって、あの大昔の!？」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士。何百年も前の負の遺産が、今になって姿を表すなんて!？」

とか言ってる内に、怪物ララバイが近づいてきた。

『サ、テ、ドイツノ魂カラ頂コウカナ?』

「なんだと!?!:なあ、魂ってうめえのか?」

「知るか!つか俺に聞くな!」

なんでその辺に食いつくのナツ?

ナツ達は、魂を喰ってやるの一言を聞いて魂って美味しいのかと議論してシリアス壊してるし、三人で戦う気満々みたいだ。

「あれ?咲夜は戦わないの?」

「僕もう疲れたし、めんどくさいし」

「もう戦いたくないだけでしょ」

「そういう事だね。でも、安心してよ。いつでも、出れるようにしてあるからさ。危なかったら、いつでも手助けできるから大丈夫だよ」

そんな会話の中戦いが始まって、エルザの騎士で切り刻み、グレイの氷で削られ、ナツの炎で焼かれてボコボコにされていく  
ララバイは自身を鳴らそうとするが、戦闘で体に穴があき音が出な

かった

「所詮、笛だもんね」

「散々引つ張つておいて、ださい・・・」

「落ちがついてよかつたんじゃね」

その後ララバイがギルドマスター達に炎で攻撃するも 그레이 に防がれ、ナツが炎を食べて三人同時攻撃でしてララバイは倒れたしかし、何故か解らないがララバイが起き上がり『喰ってやる、喰い尽してやる』と呟いているのだ

「なんだこいつは」

「さっき倒したはずだろ!？」

え、なにこのパターン原作になかったよねえ!？  
しょうがない、やるかあ(笑)

「おめえら!こつからは俺がやる。手出しすんじゃねえぞ!！」

「や、やばいつ!？」

「えっ?何がやばいのよ!？」

「今の咲夜はあの人だ!しかもやる気満々になってる!！」

「嘘でしょ!？」

「出るぞ、多重人格の魔王の本当の力が・・・」

全員がこちらを見ている。これから俺が何をするかを・・・

『小娘オマエガ相手力、オマエノヨウナ奴ガコノワシニ勝テルワケナイ!』

「はっ、おめえこそ、俺に勝てると思ってんじゃねえぞ、このクソ笛がよお!!--」

あいつらの前でこれをやりたくはないが、しょうがない  
まずは錬成からやるか・・・

パンツ バチバチ シャキンッ

咲夜は最初に錬成で鎌を錬成した  
そして、次にやったのは・・・

「イノセンス全発動最大解放!!」

「なっ、お嬢様それは危険すぎます!!」

「何故だアキ?」

「イノセンスは寄生型だと、ただでさえイノセンス原石がそのまま  
でつらいのに、それを二つも解放して・・・」

「そ、それは!!!?」

「さらに装備型で制御されてるとは言え、最大解放するなんて、危  
険すぎるにも程があります!!」

「なんて事だ!!」

まったくアキの野郎よけいなこと言っつなよな

「第1イノセンス 闇のメロディの纏まとい」

すると誰も聞いていられないような不吉な音が流れ出した

「な、なんだこの音は!?!」

「頭が割れる!!」

周りの皆やギルドマスター達は耳をふさいでいた

「第2イノセンス 闇のアイコンタクト 第3イノセンス 醜鬼劇の破壊」

そうして、僕はアイコンタクトで片目だったのを左目も開きララバイを5秒間見つめたら、ララバイが黒く染まっていき、醜鬼が劇上で踊る人形のような感じで醜くなっていき破壊の波動を出し始めた

『小娘ガソンナ武器デ倒セルト思ウナヨ！』  
「くらえっ！闇の踊り会！！」

最初に皆が攻撃していた物よりも数倍でかい闇の刃にメロディを纏わせて攻撃を放ったが、ララバイに避けられ後ろの山を2、3つほど消してしまった

一方地上では・・・

「手を出すなって言ってたけど、大丈夫なの・・・」

「おいアキ！咲夜が大丈夫って言ったんだろ？」

「ええ、そうですが・・・」

「なら、大丈夫だろう」

「俺は加勢するぞ〜！こんな面白い戦いを一人でやらせるか！」

「待て、咲夜の攻撃に巻き込まれて消し去るぞ！！」

マカロフがナツを止めた

今ならリスクがほとんどなしに、あの攻撃ができるな

「絶対大丈夫！絶対勝つ！もうあの人は出さないでやるからさ^^」

そうして、地面に降り立ち。トントントとはね始めたと思ったら突然すごい余波と共に咲夜は消えていて、気づいたらララバイの前

にいた。そう、咲夜は黒神ファントムを使ったのだ

「めんどくさいから、これで終わりね」

そういつて大嘘つきを使ってララバイの存在を無かったことにして、  
跡形もなく消し去ったのだ

「はあ、終わったあ〜」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

こうして、ララバイとの戦いは終わった

「見事！」

「す〜てき！」

「ゼレフの悪魔をこつもあっさり」と

「わあ！」

「す、すごい！これが…これが、フェアリーテイルの魔導士か!？」

爆煙の中から姿を見せる咲夜

「さすが最強！超かっこい〜！」

「あい！」

「どつじゃ！すごいだろう！」

マスター、自分の事みたいに自慢しないでくれ

「まっ、経緯はよく分らんが、フェアリーテイルには、借りが出来  
来ちまったな」

「ふむ…」

「しかし、これは…」



マスターの白い何かを追いかけているエルザ。  
笑っているナツに文句を言うギルドマスター達。

「よし、俺が捕まえてやる！」

「……………お前は、捕まる側だあ……………」

「……………」

「え？あつそつか！」

マスター達総突っ込みだねナツ。

てかなんで、そんなポジティブになれるの？

こうして僕達は、他のギルドマスター達に追われながら帰る事にした。

だが、僕だけは他の人達が誰も気づいてくれなかったので、アキと二人で寂しく修復作業をしていた

サイドアウト

## 決闘ララバイ！（後書き）

な、長くなった・・・さて、次回はなんだっけな？  
ま、いいか。次回予告書かなければ原作知らない人は楽しみできると  
思うしね

新しく登場の魔法（技、能力など・・・）

黒神ファントム：めだかボックスの黒神めだかの使う技。一回やる

と余波によつて服がボロボロになる

ダイクダンス パーティ

闇の踊り会：第1第2第3のイノセンスを全部発動し、最大解放し  
て、合わせて放つ攻撃

第2イノセンスの固定：右目だけで相手の目を5秒間見つめると、  
相手は固まってしまい動けなくなる

ナツVSエルザそんでもって聖十大魔導！？（前書き）

作者「今回はナツとエルザが戦うね」

咲夜「ねえ、なんで聖十大魔導なの？」

作者「それはですねえ〜・・・」

咲夜「早く言つてよ」

作者「本文見てくれれば解るよ！」

咲夜「ひどっ！？教えなさいよ！」

作者「知りたい方はどうぞ、ご覧下さい！」

ナツVSエルザそんでもって聖十大魔導!?

マグノリア フェアリーテイル前

今、ギルドの前ではナツとエルザの戦いが始まるうとしていた  
ちなみにエルザは、耐火能力のある鎧、炎帝の鎧になっていた

「はじめえっ!!」

マスターの合図と同時に、両者繰り出した

「だあああああ!!」

「ふっ!」

「うおおっ!?!」

しばらくの間、両者の攻防が続き共に一撃入れようとしたその時、  
パーーーーーンとドラのような音がして振り向くと評議院の蛙  
が来ていた

二人はピタッと動きが止まった

音を出した蛙は前に出て名乗った

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議院の使者である!」

「評議員!?!」

「使者だつて!?!」

「何でこんな所に!?!」

「すげっ蛙だあ!」

「咲夜は驚くところが違っっ!」

レヴィ達シャドウ・ギアが驚いた

そして、使者の蛙について驚く咲夜につっこむルーシィ

「先日の鉄の森事件について、器物損害罪他、十一件の罪の容疑で、エルザ・スカーレットを逮捕する！」

「えっ？」

「な、なんだとー!？」

「そして、サクヤ・ランライは別件で評議院に呼び出しをされているので、至急来るように！」

「ええ、僕もなんかあるの!? めんどくせ……」

「早く済ませればいいことですよ。お嬢様」

「いつてきまゝす……アキはここにいなよお」

サイドアウト

アキサイド

お嬢様とエルザさんが評議院に行ってから、ギルド内はシーンと静まり返っていた

いいえ、カウンターの方でコップに閉じ込められて騒いでいるトカゲが居た

「出せー、俺をここから出せー!ー!」

この喋っているトカゲこそ、姿を変えられたナツです

「何をしたんですかナツ？」

「アキ、あなた何処行っていたのよ? 二人が評議院に行っちゃったんだよ!？」

「ええ、知っていますよ。見ていましたから」

「アキ、どうにかできないの？」

「無理です。例え評議院でも敵に回すことは危険な事です」

「そんな・・・」

えっ？今まで何処に居たのですか？もう少しで分かりますよ^^  
それからしばらくして・・・

「出せー、俺を出せー！」「本当に出しても良いのか？」「ドキッ!？」

トカゲナツの様子がおかしくなった

まあ、あれはナツさんではありませんし・・・

「どうしたナツ？急に元気が無くなったな」

黙ってしまったトカゲナツ？に、マスターは魔法をぶつけた  
煙が上がると、そこに居たのはマカオさんだった

「マカオ!？」

「「ええっ!？」」

またしても、シャドウ・ギアが驚いた

「何でー！ー！ー!？」

ルーシイがつつこんだ

するとマカオさんは、

「すまねえ、ナツには借りがあってよ。ナツに見せかける為に、自分からトカゲに変身したんだよ」

「じゃあ、本物のナツは!？」

「まさか、エルザを追って・・・」

「ああ、多分・・・」

「洒落になんねえぞ！あいつなら、評議員すら殴りそうだ！」

「全員黙っておれ！」

皆がマスターの方に向いた

「静かに結果を待てばよい！」

皆がシーンとなってしまうた

するとその時、リクエストボードの後ろに置いてあった木像から、物音がした

「な、何だ！？」

皆が注目する中、 그레이が木像を割ると中から手足を縛られたナツが出てきた

「ナツ！？」

「『『『『『『『『ええっ！？』』』』』』」

これは流石の皆でも驚いた。裁判所に居るはずのナツがここに居るのだから

「ナツッ、せっかく俺がトカゲに化けてまでオマエを行かせたのに  
いー！？」

マカオさんのキャラがつかめなくなってきましたね？

「何の話だよ？意味わかんねえ？」

「それはこっちのセリフだよ。テメエがなんでこん中にいんだよ？」  
すると、かすかにだが笑い声が漏れた

「くっ……くくくっ……くはははは……」  
「くっく……く……」

全員がアキの方を見た

「まさか、アキお前か？」

「……ええ、お嬢様の命令で……」

「えー！？じゃあ、アキがナツを捕まえたの!？」

「ちよつと待て、俺がいつアキに捕まっただ？」

「くっくはあ?」「くく」

「だつてお前、エルザと決闘して「俺はまだエルザと戦つてねーぞ?」えっ!？」

話が噛み合っていない状況になっている様子

「なんかしらねえーけど、エルザと戦う前にアキが来て、何かと思えば突然アツパーしてきて、めちゃくちゃはえーから防げなくて、そのまま気絶して今起きたんだけど」

「くっくくええええっ!?!」「くくく」

さっきまで気絶してた奴が、さっきエルザと戦つてたナツはと皆が疑問に思った。

だが、その答えはアキが答えた。

「先ほど、エルザさんと戦っていたのは、ナツのクローンですよ」

「くくくく……ええええええ!!?!」「くくく」



「行くぞおおー！」

「やれやれ……」

エルザは、ナツに強烈なボディブローをかました。バタツと倒れるナツに対して、周りが爆笑した。

サイドアウト

評議院内 咲夜サイド

今僕は、何故か評議院に呼び出されて来ているところです。それにしても、何でだ？僕なんもしてないよ？評議会に着くとウルティアと出会った

「あ、ウルティアだあ〜」

「あら、あなたは白黒情報屋じゃないの」

「お初〜だね」

少しうれしかった。闇ギルドの奴らは僕の事を多重人格の魔王と言っけど、ウルティアは白黒情報屋と呼んでくれた

「それにしても、僕は何でここに呼ばれたんだい？」

「それは行ってみてからのお楽しみつものよ」

ウルティアも一応、評議員だから知っているかと思いついてみたが、楽しみだからと言って教えてくれはしなかった

別れる時に、これからよろしくねとか言われた。返し方が思いつかなかった

奥へ進んで行くと、呼び出された扉の前に立った

ここまで、空気になりながらも連れてきてくれた使者に、礼を言うてから一人で部屋に入った。

序に、書類はすでに渡してある。

「こんにちわ！皆さん！！あつ、オーグさんこんにちわ」

何故か分からないが、よく会うオーグさんとはフレンドリーになりつつある

軽いあいさつをした後、本題に入った

「さて、サクヤ・ランライ！魔法評議員二ノ席オーグの名を持って、そなたに聖十大魔導せいとんだいまどうの称号を与える」

「え？今なんと？」

「聖十大魔導の称号を与える・・・」

「・・・ぬうあにいいいいいい！！？」

「なっ！？そんなに驚く事か？」

「いえ、雰囲気的に驚いてみました・・・テヘッ」

今の反応で、聞いていた者は全員ずっこけた

それにしても、聖十大魔導に選ばれるとは・・・

それに伴い、現役の聖十大魔道の誰かと入れ替えになるらしい。

報告は評議会がして、少ししたら世間に発表する。正式に発表されるまで、口外するなと口止めされた。

入れ替えによる戦闘はしないらしいが、問題は寧ろ名声や待遇の後に来る義務だ。中でも、評議会の特別指令が有った場合は聞かなくてはいけなくなる...というめんどくさい内容が盛り込まれていた。

「はあ、なんでこんな事になるんだか・・・」

溜め息吐きながら、この称号を受けることにした  
そうして、帰ろうとしてエルザは大丈夫かと思い、そこら辺の使者  
の人に聞いてみたらもう帰って行ったそうだった。しょうがないの  
で一人寂しく歩いて帰った

マグノリア ギルド前

数分間一人で歩いて帰ってきたら、突然眠気が襲ってきた。だが、  
僕は夢のメモリーを持っているから、それは効かなかった  
そしてギルドに入ると、ミストガンが居た

「おお、ミストガンだ。はじめましてえ」

「っ！？お前は・・・何故俺の魔法で寝ていないのだ？」

「僕はあるメモリーを持っていてから効かないよ それと、僕はサ  
クヤ・ランライよろしく」

「そうだったのか・・・」あ、お嬢様お帰りなさいませ」なに？」

「んー、ただいまあゝアキ、マスター」

「おお・・・帰ってきたか・・・咲夜」

「今、帰ってきたのっ」

「おい・・・アキ。お前はこいつの執事なのか？」

「ええ、そうですよミストガン」

「うええっ！？アキってば、ミストガンと知り合い！？」

「ええ、お嬢様が一週間寝ている間にちよつとした旅へ出て行き途  
中で会いました、友達になる事ができました」

「いいなあゝ、ずるいぞアキッ！」

何故か、アキとミストガンが友達なのを知ってずるいと言う咲夜

「あの・・・すまないが、行かせてもらえないか？」

「ん、僕と友達になってくれるならいいよ。平行世界のジェラーさん<sup>エドラス</sup>」

「なにっ!? 何故お前がそれを知っている!？」

「それは秘密事項だよ。これは僕の本業だからさ・・・」

「まあいい・・・行ってくる・・・」

「これ・・・眠りの魔法を・・・解かんか」

「伍、四、参、弐、壱」

カウントダウンが終わると同時にミストガンは外へ出て行き、皆が置き始めた

「こ……この感じは」

「ミストガン」

「あんにやる〜!」

「相変わらず強力な眠りの魔法だ」

「ミストガン？」

「フェアリーテイル最強候補だよ」

「顔を見られたくないのか、依頼の時に眠りの魔法で眠らせて仕事を受けるんだ」

「だからマスター以外ミストガンの姿を見た事ないんだ」

「いや俺は見た事あるぜ!」

2階から、ラクサスが出てきた。

「もう一人の最強候補だ」

「咲夜! お前も見てたよな」

何でこっちに振るんだよ・・・めんどくせえ

「そうだね、初めて見たけど。僕的には面白かったよ」

「咲夜も最近で、最強候補になった」

グレイが説明役になってる・・・

「そういえば、お嬢様は何故評議院に呼ばれたのですか？」

「あー、それはね。僕を聖十大魔導士に選ばれたからでした！」

「『ええー！』!?」「『』」

僕が皆へそう報告したら驚きの声が四方八方から聞こえたと突然、

「ラクサス！俺と勝負しろ」

ナツが目を覚まし、勝負を挑んだ。

「さっきエルザに負けただろ」

「大体エルザや咲夜に、勝てねようじゃ俺には勝てねよ」

「どうゆう意味だ」

エルザ怒りすぎだよ。事實は受け入れようよ。

ミストガンに、眠らされていた時点で負けだろ。

「俺が、フェアリーテイル最強ってことだ」

「降りて来て勝負しろ」

「お前が上がって来い」

「上等だ！」

そういつて二階へ行くこうとするナツ

二階は駄目なのに、しゃーない止めるか

「(ぼそっ)・・・ひざまず 跪け・・・」

咲夜は異常の人心支配アブノーマルの言葉の重みでナツを床にへばりつけた

「俺と戦いたかったらここまで上がってくるか、咲夜を倒すことだな」

「えっ!どうゆう事」

「前にも言ったけど、ナツは新人の僕に負けているんだよ?」

「あつ、そっか!」

とやりとりしていたら、結局マスターに止められた

夜、ギルド内

僕はアキとミラとカウンターのところまでトランプをしていたら、ルーシイが来た

「ねえ咲夜、さっきマスターが言ってた、二階には上がっちゃいけないって、どついう意味なの?」

「ん?そつだね」

「まだ、ルーシイには早い話だけだね」

「ミラさん!」

「ミラ、説明お願いね」

咲夜が説明しようとしたら、ミラが来たから丸投げした。

「二階のリクエストボードには、一階と比べ物にならない位難しい

仕事が増っている。S級のクエストよ

「S級!？」

「一瞬の判断ミスが死を招く様な仕事よ。その分、報酬もいいけどね」

「へ」

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、エルザ、ミストガン、ラクサスを含めて、まだ5人しかないのよ」

「咲夜なら結構早く上に行けるかもね」

「どーという意味？」

わかる気もするが、まあ聞いておこう

「さっきラクサスが言った事が本当ならミストガンの眠りの魔法が効かなかったってことでしょ？十分上にいく資格はあると思うけど」

どーだろ？

「って聞いている？」

僕はいつの間にやらルーシイの愛玩精霊ブルーを触っていた

「聞いている聞いている」

「聞いている態度には見えないんだけど・・・」

呆れられた

「ちゃんと聞いているよお」

ちなみに僕は基本マスターとミラさんにもタメ口だ

マスターはまあともかくとして  
なぜかミラさんってタメ口が聞き辛そうな雰囲気だけど、そんなのは気にしない

「ほんと、そんな雰囲気もってそう」

ルーシーに雰囲気について賛同された

「えー？そんな雰囲気なんて持ってないよー」

ミラ、キャラ変わった？

なんかガールズトークみたいになりそうだったので先に退散

一応女子だが、そういうのは苦手なので、とりあえず家に帰って寝よう・・・

## ナツVSエルザそんでもって聖十大魔導！？（後書き）

作者「さあ、咲夜くん！君は聖十大魔導になったよ！」

咲夜「おおっ！？すげえな、作者、今日はあんたの事尊敬してあげるよ！」

作者「やったー、咲夜に尊敬されたやーい！イーヤッフウー！」

咲夜「作者が壊れたっ!？」

作者は今だピーヒャラなどと妙なことをしている

咲夜「作者が壊れたのでこれにて終わりです！下に魔法紹介しておきます！では、また次回に！」

新しい魔法（技、能力など）

クローン：誰かの細胞を少し抜き取り咲夜の作ったカプセルに入れると、短時間でうまれるようになる

人心支配・言葉の重み：めだかボックスの十三組の十三人の検体名・クリエイト みやこのじゅうめい サイティン パーティ

創造の都城 王土の使う異常。真骨頂のその1である。電磁波によ

る干渉で相手の身体を意のままに操る（「平伏せ」、「跪け」等の

一語の動詞を多用する）

夢のメモリー：Dグレのノアロードのメモリー。夢の世界へ連れて行ったりなど、いろいろできる。この話ではミストガンの眠り魔法などは効かないようになってる

## ガルナ島突入！（前書き）

作者「ガルナ島にいー、ヤツテキタ

¥（\*^

^）ノ「！」

咲夜「作者が初っ端から壊れてる!？」

作者「大丈夫だよ咲夜ちゃん！単に興奮してるだけだから（ハアハア）」

咲夜「興奮してそんなに騒いで、あげくの果てに疲れてる!？」

作者「だってオレツチ、体力ねえーもん。それより今日ね、通知表来た!！」

咲夜「あーそうですか。どうせ3とか4なんでしょ？」

作者「おお、よくわかったね。それでn」

咲夜「もう、いいよ。読者が待つてるから」

作者「それもそうだね。では、どうぞお楽しみください！（楽しくないかもだけど・・・）」

## ガルナ島突入！

マグノリア ギルド前

聖十大魔導になつてから、二日が経ちました

今僕は、依頼を終えてギルドへ帰ってきたところなのです！

それにしても、今日はナツ達がガルナ島で探検中なんだろうなあ

「ただいま〜」

「咲夜！アキ！やっと戻つて来おつたか！」

「うわあっ!?!」

僕は突然マスターに叫ばれてびっくりして、後ろの方へ倒れそうになつた

「おっと、危ないですね。マスター気をつけてくださいね」

「おお、すまんかったの咲夜」

「それより、どうしたのさ？そんなに慌てて？」

「お願い咲夜、ナツとグレイとルーシィを連れ戻して来て！」

「ミラも、一体何があつたんだよ！」

めちやくちゃ慌ててんな

「エルザは一足前に向かった。咲夜とアキ直ぐに向かつてくれ！」

エルザちょうど行つた所だつたか

「ナツ達はどこへ行つたの？」

「呪われた島、ガルナ島よ！」

「ええ！？ガルナつてS級じゃん！？」

「お嬢様でも、まだ行けないのに何故？」

「今あやつらを連れ戻せるのは、お前しかおらんのじゃ！」

何で僕になるんだ・・・

「咲夜、今日からお前をS級にしてやるからの！」

「なにっ！？じゃあ、この依頼を僕が正式に受けてあげる！」

「何じゃと？」

「何かを払うには、それなりの代価が必要だよ。等価交換って奴だマスター！」

「よしわかった！咲夜、今日からお前はS級魔導士じゃ！」

その場に居た者は声には出さないが驚いていた

「まあ、とにかくガルナ島へ行ってナツ達を連れ戻せばいいんだね？」

「頼んだぞ、咲夜！」

夕方 ハルジオンの港

現在、快樂のメモリーを使い空中を走っていたら、海賊船を発見したので降りてみた  
すると、びっくりな事にエルザが居た

「おい、エルザー！」

「！？なんだ、咲夜か」

うわお、すごい不機嫌だねエルザ

「何だつて…」  
「すまない、今回の事で気が立っていたんだ。お前達は何故ここに？」  
「僕もS級じゃないのに、マスターに頼まれて走って来たんだけど」  
「そうだったのか」  
「でも、マスターがS級にしてくださったので、今日からお嬢様はS級魔導士ですよ」  
「なっ！そうだったか・・・」  
「あおう、こちらの方は、姐さんの知り合いで…」  
「姐さん？」  
「気にするな」

明け方 ガルナ島

そんなこんなでガルナ島へ到着

「お前達はここで待て」  
「お留守番がんばってえ〜」  
「後の事はお願ひしますよー」  
「「「「「はいつ、姉さん！お嬢！兄貴！」「」「」「」」

いつの間にかお嬢呼ばわりされてた。しかも、アキは兄貴って呼ばれてる

海岸沿いに歩いて行くと、誰かの魔力を感知し、津波が見えたので駆けつけようとしたら、でかいネズミが飛び込んできたもんだからエルザが斬りかかり、僕は錬金術でトカレフを作ってたので、撃ちまくった

すると、近くに居たのかルーシィが近寄ってきた

「咲夜、アキ、エルザ「ギロツ!!」さん……」

うわぁ、睨んだだけで丁寧語になったよこの娘

「(そうだ、あたし達ギルドの掟破つて、勝手にS級クエストにきちゃったんだ……)」

ズーン、て言葉がルーシイの頭に付いてる様だ

「ルーシイ、私達が何故ここに居るか、解っているな？」

「……連れ戻しに……ですよね……」

ですよねの部分が山彦風に響いた

「ルーシイ、よかつたー、無事だつて……ハツ!？」

そして後から来たハッピーが、エルザに気付いて全速力で逃げるハッピーだったが、いつの間にかエルザに捕まっていた

「ナツは何処だ!」

「ちよつと聞いて、勝手に来ちゃった事は謝るけど、今この島は大変な事になってるの、氷漬けの悪魔を復活させようとしてる奴等がいたり、村の人達はそいつらの魔力で苦しめられていたり、とにかく大変なの!あたし達、なんとかこの島救ってあげたいんだ!」

その言い分、今のエルザじゃ逆効果だぞ

「興味が無いな!」

「!?!?じゃあせめて、最後まで仕事w「チャキツ!」「ヒツ!?!?」

エルザは、ルーシイに剣を突き付けた。

「違うぞルーシイ、貴様等はマスターを裏切った！ただで済むと思うなよ！！」

「あ、でもエルザ。僕S級になったから、この依頼を正式に受けたんだよ」

「そうだったのか？だが、こいつらは掟をやぶった！」

めっちゃ怖ええなエルザ！ん？ルーシイが助けてって目で訴えているみたいだね？でも、この場は自分の命が大事です

咲夜は、自分の前で合掌をして、南無阿弥陀仏を唱えた

「（そんなく、てゆうか縁起でも無い事しないで下さい！）」

そして僕は近くで気絶している、イタイ考えを持つシェリーの魔法を覚えた

それでハッピーが、少し離れた所に村の人達がいた事を確認した後、僕達はそっちの方に向かった

昼過ぎ 資材置き場

村の人達に事情を話してテントを貸してもらい、グレイを待つ事にした。

エルザは玉座に座っている感じで座っていて、その左隣に縛られたルーシイとハッピーが泣いていた。ちなみに咲夜とアキは、エルザの右隣に立っていた。

そして、グレイがやって来た。

「遅かったな、グレイ！」

「エルザ！？…ルーシィ、ハッピー！？…あつ後咲夜にアキ」

僕らだけ反応薄いよ 그레이！

「だいたい事情はルーシィから聞いた。お前はナツ達を止める側ではなかったのか？呆れてものも言えんぞ」

「ルーシィ！ハッピー！」

二人はロープで縛られ、座らされている

「村で、零帝の手下と戦つてた筈なんだけど、行つてみたらナツが居なかったの。ナツの事だから大丈夫だとは思うけど、それからとりあえず 그레이の所に連れて行ってエルザに言われて」

「おいらが空から探したんだよ。そしたら、この資材置き場に人が集まっているのを見つけたんだ」

「 그레이、ナツを探しに行くぞ！見つけ次第ギルドに戻る！」

「な、何言つてんだエルザ！？事情を聞いたんなら、今この島で何が起こつてるか知つてんだろ！」

「その事なら問題ない。今回の尻拭いは、咲夜が引き継ぐ事になった」

「な！」

「悪いがそういう事だから、後の事は僕に任せてさっさと帰つた方がいいと思うよお」

僕は微笑みながら話してくる

「おい咲夜頼む！今ここにはリオンが…兄弟子がデリオラを復活させようとしているんだ。最後まで、やらせてくれ」

「…やっぱり、 그레이はウルの弟子なんだね」

「なっ！ウルの事を知ってるのか」

「うん。ていうかグレイも弟子だったなら、僕は兄弟子？姉弟子？  
なんだよね」

「「「！？」」」

流石に皆びつくりなようだ。てか、僕もびつくり何で、こんな記憶があるんだ？

「と言っても、僕は半年もウルから習っていないんだけどね」

「でっでも、咲夜って一回も氷の造形魔法使ったことないよね？」

と、ルーシイが疑問を投げってくる

この疑問も当たり前なんだよね

ルーシイの言うとおり、僕は一回も氷の造形魔法は使っていない。  
いや正確には……

「使えないんだよ。氷の造形魔法が……」

「え？でも、弟子だって？」

「造形魔法といてもいろいろあるじゃん？例えばラキが木の造形魔法を使うでしょ？」

「ああ、そういえば……」

「それで、僕は氷に限定せずに、造形魔法共通の基礎を学んだんだ。  
後は独学であるものの、造形魔法ができるようになったんだ」

「あるもの？」

「今はヒ・ミ・ツでね」

「ええ」

さてと、もうすぐあいつらが来るね

そして、遺跡にたどり着くと遺跡が斜めに傾いていた

「ナツだね」

「ああ、ナツだな」

僕の言葉にグレイが賛同する

すると茂みから変な奴らが大量に出てきた

「見つけたぞ妖精の尻尾」

変な奴の一人がそういった

「行け、ここは私たちに任せろ」

「僕も？」

「当然」

しゃーない

「君達、探してたんなら死ぬ覚悟くらい出来てるよね？」

僕はグレイが行ったのを見送った後、変な奴らにそう言い放つ

「行け！！」

「オオオオオオオオオオ」

変な奴らが変な奴の一人の号令で一斉に襲い掛かる

「そつか・・・死にたいんだね？」

僕は致死武器を調節して使った

そうしたら向かってきた奴らの体から一斉に血が噴き出てきた

「「「「「ぎゃああああああああああ「「「「「「

そのまま変な奴らは倒れた

「はやっ!?!」

ルーシイがつっこむ

「何秒もたなかつたね」

「意味が分からんぞ?」

今度はエルザにつっこまれた

「こいつら放っておいていいよね」

「多分大丈夫だろう」

「そりゃ手加減してるもん!」

その時、地震が起きた。

そっか、ザルティ（ウルティア）が時のアークで直したんだね。覚えたいなあ」

「なんの音だ?」

「さあ?」

とぼけてみちやった

「あつ!?!?そんな!?!」

「傾いてた遺跡が、元に戻ってるよ!?!」

「嘘!?!?」

皆唾然としていた（咲夜とアキ以外は）

「これでは、月の光がデリオラに当たっちゃうな」

「どうなってるのよ〜!？」

すると、

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「ひっ!？」

「耳がキンキンする〜!？」

「耳が痛いよ〜何なのこの音〜!？」

「何んですか!?!この音はいつたい!？」

「まさか、デリオラが!？」

とうとう復活した厄災の悪魔、この時グレイはある決断をする

サイドアウト

## ガルナ島突入！（後書き）

作者「おお、デリオラが復活しちゃった！」

咲夜「ちよっと！もしかしてと思うけど、僕はデリオラと戦うって事！？」

作者「ご名答！・・・と言いたい所だけどさあ？って感じなんだよね」

咲夜「うええ！？何で分からなんだよお。気になるじゃんかあ」

作者「ま、気になっていてくれや！それでは、次回もお楽しみにしていてくださいね」

### 新しい魔法

快樂のメモリー：Dグレのノアテイキのメモリーである。万物の選択をできて作中で、出てきたように空気を触れたいと思えば空中を走る事もできる

魔力感知：咲夜本人のオリジナル能力で、どんなに遠い距離でも、

誰かの魔力を感知することができる

錬金術：今回の作中での錬金術は、ハンドガン？のトカレフなどを作っていた。このように、銃などもいろいろ作れる

シエリーの人形撃にんぎょうげき：今回新しく覚えた魔法である。自然系の木や岩などを使って人形を作ることができる

？の造形魔法：のちに詳しく出します

スカーデッドスカーデッドマイナスマイナス致死武器：めだかボックスの過負荷マイナスで志布志飛沫しぶしが使う能力。これを使うと、誰も古傷を開く事ができる

デリオラとの戦い（前書き）

作者「やつほ

¥（\*^ ^\*）ノ

い、やつ

て来たぜデリオラ

」

咲夜「またしても、作者が壊れてるの!？」

作者「だ、大丈夫だよ（ハアハア）ちよつと興奮して疲れてるだけだから（ハアハア）」

咲夜「結局は疲れてるんじゃない！なんだよ前回からさ!！」

作者「では、疲れたのでお話に行こうと思います。」

咲夜「まったく・・・どうぞご覧下さい!！」



僕はあることを考えた

「そついや俺にも時が操れるんだ！未来だ！1秒後にお前w「オラ  
アーーー！！敵は何処だアーーー！！！！」ブベバアッ！！？」

快楽のメモリーを使いながら黒神ファントムを使ったらナツに直撃  
して吹っ飛んだ

「おや！？？」

「およ？なんか吹っ飛ばした気が…あ！あんた零帝とかゆう奴の手  
先か！」

「それよりあなたは、あの方のお仲間ですか？」

「ん？そう、新人の咲夜って言うの」

「新人でS級をクエストに参加していると」

「だって僕、S級魔導士だもん」

「あ！お嬢様見知らぬ人に個人情報を言っっては、いけないですよ！」

何故かアキに怒られた。アキは気づいていないの？

「ねえ、アキ。この人は見知らぬ人じゃないよ？」

「えっ？そうなんですか？」

「さっさと正体見せなよザルティ」

「…いつからですかの？」

「最初からだよ、だって僕達もう知り合いじゃん」

「ほっほっほ！面白いことをおっしゃる」

「さっさと変身解けよ。ウルティア」

そして僕は殺気を放ちながら言った

「くっ！？やっぱりあなたには敵かなわないわね。聖十大魔導士の咲夜」

オッサンが女性に変わった

「まあいいわ…とりあえず死んでくれるかしら？」

いきなり玉を飛ばしてきた

「僕は死なないよ。それにそんなモノ！」

錬金術で大砲を作りそこに入れ、ウルティアに向けて放った  
だが、ウルティアにまで行かずにこちらへ戻ってきた  
ウルティアの魔法を知っているから対処できた  
でも一応驚いてあげた

「ええっ!？」

「私は物体の時を操れるのよ。故に、水晶を壊れる前の時間に戻しただけ」

「マジか!？」

「さて、行くわよ！」

直した水晶の他にも、たくさんの水晶が飛んで来た

「ほんとめんどくさい…第1イノセンス発動…」

「なっなに!?!この光は!?!」

本能的にめんどくさくなったので、イノセンスを発動してあの人に  
任せた

「お嬢様は本当にめんどくさがりですね」

「しょうがねえーよアキあいつは俺とは違うからな」

「あ、あなたはいつたい!？」

人格の違う咲夜に驚くウルティア

あれ?あいつはこの女に見せてねえのか?

「ま、いいや。俺の周りのすべての音よ、今ここに音の呪縛となれ」

咲夜が言い放った途端、アキが笛を吹いたら、飛んで来た水晶すべてが動かなくなつた

「なっ!?!水晶たちが動かない!?!どういう事なの!?!私の制御が効かない!?!」

「当たり前だ!俺かアキが音を出していれば、音が呪縛となり強制的に動かなくなる」

「なんですつて!?!」

「隙あり!跪け!」

「!?!」

隙を見計らつて異常人心支配アブノーマルを使った

「ぷはっ!?!どういう事よ!?!体の自由が利かない!?!」

「はっ、無様だなあ女!地面にキスなんかしてよお(笑)！」

いつの間にか、ウルティアの前に現れた咲夜

「なっ!?!」

「さして」

咲夜は、ウルティアの胸倉をつかんだ



「こつなつたらやるしかねえ！あいつ、ぶつ倒すぞ！」  
「全員の力を合わせれば何だって出来るよ！」

すると、ボロボロになったリオンははえずりながら来た

「ふっ…ふふっ…お前らには…無理だ！…あれは…俺が！…」

「リオン…」

「お前は…落ちこぼれ咲夜か…」

「咲夜が落ちこぼれたと？」

「まあ、僕は氷の造形魔法はできなかったよ。でもあるものを造形する事ならできた」

「はっ…お前には…無理だな。ウルを超える為に、俺が…はははははっ！」

お前の方が無理だ

「お前はなんでそんなに落ち着いて居られるんだ」

「だから顔に出ないだけだ。多分前にも一度言ったと思う気がする」

「覚えてねえよそんなん」

まあ作者もいつ言ったかまでは覚えてないし

その後デリオラに挑もうとするリオンを気絶させてグレイが止める

「もういいよリオン…デリオラは俺が封じる」

そういつてグレイは絶対氷結アイスドシエルを発動させようとする  
だがナツが止める

そしてデリオラが腕を振り上げ殴りかかってきた

やっぱり原作変わってるよ…

なんで僕の勘はやなとこで当たるかね

「しょうがないなー」

僕は向かってくるデリオラの拳を受け止める

受け止めてから、デリオラに向けて攻撃を仕掛けた

「空気創造、壱ノ型 五月雨さみだれ！」

更に、それを飛ばすと同時に油と火を付けたら大きな火の雨が降ってきた

ゴオオツ！バキツ！！

火を浴びてデリオラに亀裂が入った

そして、デリオラの全体へと亀裂が入っていった

「くく！！！？？」

「（やつぱ、こうなつたか）」

「な、なんだ！？咲夜のじゃねーぞ？」

「ば、バカな！？そんな、まさか！？デリオラは…既に…死んで…！？」

崩れて行く、デリオラだったものが…

どうやらさっきのは最後の最後の力を振り絞った一撃だったようだ  
グレイが脱力する

僕はグレイに言う

「デリオラはもうほとんど死んでたんだ」

「え？」

「さっきの一撃もほんのわずかに残っていた力を出したんだろっね。  
多分、氷ウルに閉じ込められている間に生命力をどんどん削られていっ

てたんだよ」

そう言うと納得したようで

グレイはウルに感謝し、リオンはウルに対しかなわないと悟る

「すげーな、お前の師匠！」

「ああ、そうだな。勝てなかったんじゃなく、勝つのに時間がかかっただけだったんだな！」

そしてグレイは、泣きながらウルに最後の礼を言った。

「…ありがとうございます…師匠！」

「へへっ」「

しばらく感動しながら、その様子を見てみると突然頭に声が響く

『やほー、元気？』

この声・・・あのくそ神か・・・

（大事なシーンをジヤマしないでくれねえーか？）

『おお、よくいきなりテレパシーが使えるね』

（大抵は頭の中で考えるだけだ、それに一回使ったことがあると思っぞ）

『あ、そうなんだ。それよりさ、あの人出しながら殺気出すのやめて！？』

（最後の一撃…やっぱり原作が少し変わったか？）

『そんなに影響は無いよ。大抵二人以上の転生者を送った場合は狂っよ？』

（ふーん・・・ってちょっと待つんだ、二人？）

『うん、まあ彼は原作介入の意思は無いけど』

(ナルホド・・・お前今まで何回ミスしたんだ?)

神は答えない

てかどっか消えた

あんのくそ野郎

『まああの時何もしなかったらいつか体力を回復させて来ただろうけどね』

消えたと思ったら最後にこんな一言を言ってまた消えた

ありゃ?

気付いたら誰も居ない

置いて行かれた…

流石に置いてかれたら…僕はもう泣くぞ

## デリオラとの戦い（後書き）

作者「ふむ。もしかしたら他の転生者くるかもな」

咲夜「どんな人を入れる気よ？」

作者「・・・それはお楽しみに」

咲夜「なんか、作者の性格がつかめてきたわ」

作者「そう？さて、次回でガルナ島編は終わりですぞ！新しい魔法は下に載せておきます」

咲夜「では、次回もよろしくお願いします。それと、コメントお願いします！」

### 新しい魔法

変身魔法：ウルティアの使っていた魔法。別の人の姿になれる

時のアーク：変身魔法同様ウルティアの使っていた魔法。物体の時間を操る事ができる。

第1イノセンスの音の呪縛：イノセンスを発動しながら、音を流すと音が呪縛となり指定したものを動かなくすることができる

月の破壊（前書き）

作者「とうとうガルナ島も終わりだねえ」

咲夜「作者はどうしてそんなにのんびりしてんの？」

作者「のんびりしてる訳じゃないんだよ。ただ・・・」

咲夜「ただ、どうしたのよ？」

作者「ハハハハハ、もういいや！というか、よくよく考えると、滅竜魔法を一回も使ってない！？」

咲夜「そういえば、そうだね。今回で使うか！」

作者「それは置いておいて」置いとくなっ！」「おいかぶるなよ。まあ、ご覧ください！」

## 月の破壊

ガルナ島 海岸

「いやー、終わった終わった!!」

「あいさー」

「ほんとー、一時はどうなるかと思ったよ。すごいねウルさんって!!」

「これで俺達も、S級クエスト達成だー!!」

「やったー!」

「もしかしてあたし達、二階へ行けるのかな?」

「はっ」

この子達は、まったく馬鹿だなあ。黙って来てんだからさ。二階へ行ける訳ないじゃんか。てか、まだ達成してないしああっ!エルザの後ろに鬼神が見えかけてる(汗)

「お前らー、一番大事な事を忘れてるぞー」

「おっ咲夜!やっと思いついたか。それより、大事な事ってなんだ?」

その時、エルザが前に出た

そして、ナツ、ハッピー、ルーシィ、グレイの四人は、大事な事を思い出した

わあー、皆「「「「ヤバッ!!」「「「「て感じになってたね

「そうだったー。お仕置きが待ってたんだ!!」

「その前にやることがあるだろ」

「「「「「?」「「「「「」

「今回の依頼は、悪魔にされた村人たちを救う事なんだよ？」

「そっぴやそっぴやだっつた！」

「それに、デリオラが死んでも、村人は悪魔のままみただし。残る原因はムーンドリップによる影響しかないよ！てなわけだから、月を破壊しようじゃないか！」

「……（おいおい、無茶な事考えてるな）」「……」

「それが咲夜（お嬢様）です！」」「……」

そして、資材置き場へ行つたみたら、誰も居なかったが、村人の一人が村に来てくれと言うので、村があつた所へ行つた  
そっぴやえば、リオンって何処に行つたんだ？ま、いつか！

### 復活した村

ザルティが直した村に来て、一同びっくりしてました  
村長の頼みで、月を破壊してくれと迫ってきている  
咲夜は月を壊す事を考えていた。

「おい、とんでもない事をしれつと言ってるぞ」

「あい、それが咲夜です」

エルザの疑問を言う為に、村中の人達を集めた

それで、エルザの疑問を言いつづけてると、咲夜が飽きてこつ言つた

「ねえ、もう月壊していいよね？」

「待つんだ、もう少しで終わるからな」

「ん、飽きたので行っちゃいます！」

「あつ！こら待て！」

ズルツ！ドスン！！  
月を壊すと走り出した咲夜と、止めようとしたエルザが復活していた  
た落とし穴に落ちた

「「キヤツ！？」」

「お嬢様っ！？」

「あっ！？落とし穴まで復活してたの！？」

「キヤ、キヤツて言ったぞ！？」

「か、可愛いな！？」

「エルザと咲夜にもそういう一面があつたんだな」

「お、怒られますよ！？」

「あたしの所為じゃない！？あたしの所為じゃない！？」

その後二人で、何事も無かつたように振る舞った。僕が、たくましく  
くない！？

そして、月を壊すことにしました

そこでまたしても、咲夜が月を壊したがるので、咲夜がやる事にな  
った

「さーて、何を使ってやろうかなー」

「さっさと、終わらせろよ咲夜！」

「あーもー、わかってるわ！たくナツは、黙ってられないのか！  
あ！」

いいこと思いついた。これなら、触ればいいだけだし楽しじゃん  
何かを思いついた咲夜は、さっそく行動に移した

「月歩げっほ！」

そうして、空を蹴って上昇してある物に触れて戻ってきた

「あれ？咲夜つてば、なんもしてないじゃない？」

「ん〜、これからするんだよ？」

「『『『『『えつ！？』『』『』『』」

「荒廃した<sup>ラフレシア</sup>廃花！」

咲夜が叫んだ瞬間、空を覆っていた膜が腐っていった

「おおおおおおおっ」

「『『『『『うそだあああ！？？』『』『』」

村人たちは大歓声を、ルーシィとグレイは悲鳴に近い叫び声をあげている

そして遂に月が腐った……

いや、正確には空を覆っていたものが腐ったのだ

そのため月は健在だ

ただし、どこでも見られる美しい月だ

「わっ！？何これ！？月じゃなくて空が腐ったの？」

「そう、これが今回の原因だよ」

「どーなつてんだこりゃ！？」

「この島は、邪気の膜で覆われていたんだ」

「膜？」

その疑問にエルザが答えている

実はこの島月の<sup>ムーンドリップ</sup>栗の影響で、邪気の膜で覆われていたのだ

そして今、その膜を壊したという訳だ

膜を壊したことにより周りが光っていた

これで村人も元通りだな

「けど…元に戻らねえのか……？」

「そんな……」

「いや、元に戻っているぞ」

「……？」

「さっきエルザが壊した膜は彼らの姿でなく、記憶に影響していたんだ」

「記憶？」

「そつ。元々彼らは、悪魔なんだよ」

「ええええええ！！」

「マジ……？」

「うつつむ。まだ混乱しているが……」

このあとエルザがもう少し詳しく説明していた

そして、何でも村長息子だというボボが戻ってきた

何でも自分たちを人間だと思っっている村人たちが恐くなって避難していたらしい

この日の夜は悪魔の宴という凄い響きの宴で一晩中盛り上がった

そして、数分後……

「勝負だ！サクヤーーーー！！」

なんかナツが勝負を挑んできた

「今から！？」

僕は突っ込む

ツッコミ役はルーシィじゃなかったのか！？

「いつ決めたのよそんなの!!」

ルーシイが突っ込む

「突っ込んでんじゃん」

「う・・・!!」

僕とルーシイでアホコント

「いいから俺と勝負しろ!!」

ナツはまだ言ってる  
すると

「いいゾー!!」

「やれやれー!!」

「ヒューー」

村人・・・いや悪魔がおおる  
村の方々もノリノリなので

「じゃあどっか広い場所探して・・・」

「こつちに丁度いい場所あるぞー!!」

村の悪魔が指をさす

そこには広い空間があった

「広いな」

「闘うんなら丁度いいだろ」

というわけで

ナツVS僕

なんてことになってしまった  
で

「行くぞー!!」

ナツが叫び向かってくる

「火竜の鉄拳!!」

容赦なく顔面狙ってきやがった

「拒絶・・・」

僕は快樂のメモリーを使ったので、ナツは僕に当たらずそのまま通り抜けた

「なにい!?!」

「攻撃を通り抜けただと!?!」

外野が騒ぐ

そして僕はナツの後ろから攻撃を放った

「初めて使うけど、星竜の咆哮!」

咲夜は口から星を噴いた。そして、星であるので眩しくなり、ナツへの目眩ましとなった

そこへ更に追撃して、一言言った

「跪け！」

その瞬間ナツが地面にひれ伏した  
そのまま僕は以前ミストガンが来たときに覚えた睡眠魔法を使いナツを眠らせる

ナツは土下座の体制でいびきを掻き始めた

「勝者！咲夜！」

エルザが判定を下す

というかエルザが審判やってたの！！

「くかーくかー」

ナツはのんきにいびきを掻いていた

翌日

ギルドで正式に受理された依頼ではないということで報酬は受け取らなかった

だが、正式に受けたのは咲夜だったので、報酬は全部、咲夜が受け取った。追加報酬で貰った星霊の鍵はいらないので、ルーシィにあげて島を出た

結局得したのは咲夜とルーシィだけだった

話が終わった頃、丁度エルザが追加報酬の人馬宮の鍵を貰っていた。

「では、せめてハルジオンまで送りますよ」

「いや、船は用意出来ている」  
「えっ？」

ガルナ島 海岸

「海賊船!?!」  
「まさか、強奪したの!?!」  
「さすが!」  
「いや、そこまでしてないから」  
「エルザがちよつと脅しただけだよ」

ナツ、ハッピー、グレイ、ルーシィの四人はブルツとした

「姐さ〜ん!お嬢〜!兄貴〜!」  
「あ…姐さん!?!お嬢!?!兄貴!?!」  
「…なにやら気が合つてな(合いまして)」「」  
「さすがエルザ様!咲夜様!アキ様!」  
「だから様つて…!」  
「舎弟の皆さんも、乗ってくださいえ〜!」

どうやら四人は、僕とアキとエルザの舎弟扱いみたいだな  
そんなこんなで、ガルナ島を後にした

「皆さん、ありがとうございます!」  
「元気でね〜!」

ちゃんと別れの挨拶もした  
崖の上にはリオン達をちらつとだけ確認した

数日後、マグノリア

「ん〜へへ、帰ってきたぞー！」

「たぞー！」

「しっかし、あれだけ苦労して鍵一個か。しかも報酬は全部咲夜の  
もんだしよ」

「折角のS級クエストなのにね」

「正式な仕事を受けたのは咲夜なんだ、これくらいが丁度いい」

「「そうそう、文句言わないの」「」

「そりゃあ一番得したのはルーシイと咲夜だけだからな」

「売ろうよそれ」

「何てこと言うドラネコかしら!？」

貴重な鍵を売ろうとするハッピーに嫌がる素振りをするルーシイ

「で、今回貰った鍵は、どんなのなんだ？」

「人馬宮のサジタリウス！」

「人馬だと!？」

グレイは首から上が馬になってる人間風を想像した

「いや、違うでしょそれ」

ルーシイは馬の首部分が人間の上半身のを想像した

「いや、案外…馬の着包みを着た感じだったりするかもよ!」

「さすがにそれは…」

咲夜は正解を言ったんだが、信じてもらえなかった

一方ナツは、人顔の花にタコのような足があるのを想像した

「馬でも人でもないよ、それ…」

しかし、無情にも陽気な彼らに絶望が降りかかる事に気付いてなかった

「のん気な事だな。まさか帰ったら処分が降るのを忘れたわけではあるまいな？」

「「「えっ!?!」」処分!?!」

「ちよつと待つて!?!それつてもう、お咎め無しになったんじゃ!?!」

「バカを言うな!」

無情にも死刑宣告をするがごとく、四人に絶望が降りかかる

「お前達の行動を認めたのは、あくまで私の現場判断だ!罰は罰として受けて貰わねばならん!」

「「「げっ!?!」」そんな〜!?!」

少しは弁護してやろうかね。

「で、でもさエルザ、折角S級クエストをやり遂げたんだし、少しくらいは「咲夜!」はっはい!?!」

「あんまり甘やかすな!それに、判断を下すのはマスターだ!私は弁護するつもりは無い!お前は関係ないだろう!そうゆうわけだから、それなりの覚悟しておけ!」



取り残されたルーシイと咲夜

そして置きっ放しの荷物

ていうか、荷物の中に何で魚とヤシの木があるんだ？

## 月の破壊（後書き）

作者「空が腐ったって！すごいね！！」

咲夜「あんたが考えておいて感動してるって、あんた馬鹿なの！？  
やっぱり馬鹿なんでしょ！？」

作者「平均的な頭脳が10人いて、1位から考えたら僕は5か6な  
んだかな！！」

咲夜「へへ、作者にしては意外とまあまあのね？」

作者「まあまあゆうなっ！では、次回は幽鬼ファンタムの支配者編です！」

咲夜「次回もお楽しみに」

## 新しい魔法

月歩：爆発的な脚力で空を蹴って浮く技である

荒廃した廃花ラフレシア：めだかボックスのマイナスじゅうざんの十三組の江迎怒江が使用する過マ  
負荷イナスである。手に触れた物を生物・無生物・気体問わず全て腐らせ

てしまう。主人公である咲夜は神により強弱やオン・オフをすること  
ができる

星竜の滅竜魔法：作者オリジナルの魔法。ナツなどの滅竜魔導士と  
同じである。

睡眠魔法：ミストガンの使っていた魔法。相手を眠らせられる

## 前回の魔法

空気創造：空気を使う造形魔法である。参考はグレイです。空気創  
造はグレイの様に形を造った後に、火を付ければ火の造形になり、  
水をやれば水の造形にもなる。

かるた大会（閑話休題）（前書き）

作者「はい、皆さん二日遅れてあけおめ」

咲夜「ちよっと、作者なんで昨日更新しないのよ!」

作者「しょうがないじゃん!母さんが手伝いやれって、うっさいんだもん!」

咲夜「お母さんのせいにしてるし・・・」

作者「まあ。今回は、話し進めるのもあれなんでさ、閑話休題ってことだね?」

咲夜「まあいいんじゃないの?」

作/咲「それではどうぞ!」

## かるた大会（閑話休題）

どうも皆さん、異世界で情報屋やってる咲夜ちゃんです  
でね。今回はお正月の次の日、お仕事行きたくないけど  
行かないやだから、依頼を見ていたのそしたら、

『お正月なので、誰か楽しいイベントを考えてください』

という依頼があった。しかも、頼んできた人はマスターだった

「マスター！この依頼受けてあげるよ！」

「おお、咲夜。これを受けてくれるのか？」

「ちょうど暇だったし（暇じゃないけど）面白そうだからさ」

「そうかそうか。なら、みんなが楽しめる様なイベントを考えてく  
れ！」

「お嬢様なら、できますよ。がんばってください！」

「こらー！！アキってば。何見ていようとしているのよ！？」

「え？いや、だってその依頼は、お嬢様が受けた依頼ではありませんか  
んか」

アキは執事だというのに主人である僕を助けない気か！？

まあ、自力でも頑張ればできると思うけど・・・

「さあ、お嬢様。がんばって考えてくださいね？」

「あーもう！わかったよー！！自力ならいいんでしょ、自力なら！  
！！」

そういう訳で数分で考えてマスターに提案してみた





まったくグレイは変な質問するなあ

「いやいやいや、変な質問じゃねえからな！？俺たちからしたら普通だからな！？」

「あ、それもそうだったね。気づかなかった」

「でさあ、こいつら誰？」

「えっとーまず、ラゼルちゃんね。この子は破天荒遊戯っていう世界の主人公です」

「へえー、可愛いなあ（小声）」「ついでに言うと魔法も使えるし、体術もそこそこなんで」なっ！？」

あとから攻めですぜっ、ざまあみるグレイめ

「次に、めだかちゃん！この子はめだかボックスの主人公で、スポーツ万能、勉強万能いろいろできる子なんだよあ」

「ほお、そりやすげえな。俺たち勝てるのか？」

「なんだグレイ、勝つ気がしねえってか？」

「んだとナツ！！この俺が勝てねえわけないだろ！！」

「それはどうか！俺のチームにはエルザがいるんだ！！」

「くっ、ずりいぞ！」

「しょうがねえだろ、チーム分けでこうなったんだからよ！」

はあ始まったよ・・・なんでこの二人は普通の会話から喧嘩に発展するんだ？

「まあ二人は無視して、次はネウロと弥子！弥子ちゃんは一言で言えば大食い娘であるアニメの主人公だね。あ・・・ネウロは・・・まあ、見てれば分かるよみんな（遠い目になっていく）」

「お嬢様！？遠くへ行っではいけませんよ！？」

「はっ！危なかった。最後はエドワードだね。エドは鋼の錬金術師の主人公です。鋼の称号を持っている人なんだよ」

「ん？錬金術師とやらは全員、称号を持っているのか？」

「いや、軍に入っていない人は称号を持っていないよ。もしかしてエルザ、軍で称号を貰いたの！？」

「なっ、なぜ分かったんだ！？（凶星つかれて唾然）」

「えー凶星かよ。まあ、エルザだもんね」

さて、紹介はこれくらいにしとこうかな

「では、みんなーこれから真剣勝負かるた大会を始めまーす」

「ooo」

「まず、最初にやるのは、第1チームと第3チームだあ！！って、最初から僕出るの！！？」

司会進行は僕がやっていたかったのに・・・

「さて、両チームとも準備はできたかー！」

「すいません。ヒューズ中佐司会を任せてしまって・・・」

「いや、構わんよ。それよりも今日は何の日か知ってるか？今日はエリシアちゃんの誕生日だあー！！！」

「ooo」

やっぱ、マカオに任せればよかったかな？

ヒューズ中佐ってば最初はエリシアちゃんだからなあ

「さあ、準備ができていようだな！では始めるぞ！」

「よっしゃー、こっちにはエルザが居るんだ。絶対勝つぞハッピーー！！！」

「あいさー！ー！」

「ロキ、ラキ、絶対勝つよ・・・」

「あ、ああ（何か咲夜から殺気が感じられるのは気のせいかな？）」「わかったよ（すごいわ、咲夜から殺気があるすごい出てきてる！）」

殺気を放ちながら勝ち気で大会に挑む咲夜でいた作者のオレツチからすると、咲夜さんってば殺気で人をやっちまいそっだ

「作者ちよつと黙つとけよ」

はいつ！すいませんっしたあ！！

「そんじゃ、両チーム凄い意気込みだが、そんなの関係無しに初めまーす」

「一枚目、あの日からやって来たのは借金取り」

「はい・・・」

「「「ええ！？目の前かよ！？」」「」

「ちよつと待つて突つ込むところそこ！？」

「ふっ、たとえ目の前だろうと遠くだろうと、静かに取るのが僕だから」

「その前にかかるたの読み札！何であんなネガティブなのよ！！」

ルイージってばそこ突つ込んじゃいけないよ。一応僕の特注かるたなんだから

「あんたの特注なんかいい！！てか、ルイージじゃないわ！」

「ルーシイ今日もキレがいいね！」

「あら、そう？それはありがとうね」



「ハッピー、ロキ、ラキお手つきです」

o r z o r z o r z ガー——ン——

三人同時にお手つきをしまい、エルザと咲夜の一騎打ちになった

「では、最終の・・・」「はいっ！！！！」「まだ読み途中なのに  
(泣)」

どんまいミラ、しょうがないって事だよ

「おおっとー、ほぼ二人同時に声がしたがどっちだあ！！」

「ヒューズ中佐！僕だ！僕の手が下にあるよ！」

「ん。おおホントだ！ということはこの勝負、第3チームの勝利！」

「やったあ————！！！！」

「—————うおお————！！！！！！！！！！」

「くそー！エルザなんで勝たねえんだよ！」

「ナツ、これがかかるたでの実力という訳だ・・・」

うふふふふ、ナツつてば滅茶くやしがつてらあ。エルザの言つとおり  
かるたでの実力なんだよ

「そういえば、ミラさん。」

「グスツ、なにルーシイ？」

「最後の読み札はなんて書いてあつたんですか？」

「えーつとね。『最終の電車をずっと待ったのにいつまでも来ない  
と思つたら、駅の時計が2時間遅れていた』ですつて」

「かなしっ！？その人悲しすぎますよ！！！？しかも2時間も遅れて  
るつて、駅の人それ直さないかい！！！？」

だから、ルーシイそれは僕の特注かるただから全部ネガティブものなんだよ〜

さて、第2回戦と行きたいが、そろそろ時間もあれだな

「はいみなさん、もう時間があれなんでー今日はお開きにしまーす」

「続きはどうする気じゃ咲夜？」

「明日に持ち越すって事でー、明日終わらなければ、明後日も！」

「おっしゃー次こそはやってやるぞおー！！！」

「そんじゃお開きでーす。みんな明日もがんばってー」

こうして、かるた大会は明日に持ち越しで、お開きとなった

咲夜の屋敷の地下倉庫 アキサイド

ふう、最初と最後の出番ですか・・・

どうも読者の皆様（読者がいるとは思えませんが）、何日かぶりでございます

今日はお嬢様企画のかるた大会でございました

一回戦目から、お嬢様が活躍してそれはもう、たくましい限りでございますでしたね

ただいま私は、お嬢様の今回の活躍をみて幼少期のアルバムが懐かしくなり

見に来ている所でございます

おや？誰か来たようですね

「そこに居るのは誰ですか？」

「ア、アキ・・・」

「ああ、お嬢様でしたか。どうか致しましたか？」

「いや、アキがこっちに来るの見たからさ。何してんの？」

「ええ、今日のお嬢様の活躍をみて幼少期の頃のお嬢様が懐かしくなりまして」

「それで？」

「アルバムを少し拝見させてもらおうと思ひまして」

「アルバムだつて！？なんでそんなものが・・・ああ！あの神の野郎やっぱり記憶をいじつてやがるな！！」

「まあまあ、お嬢様も一緒にご覧になりますか？」

「一緒に見るかつて、それ僕のだし」

「そこは気にしてはいけませんよ」

「そんじゃ見る」

こうして、二人で寒い所でアルバムを見ていたから咲夜は風邪をひいてしまった

だが、悪魔であるアキは次の日もピンピンしていたのです

かるた大会一日目が終了した。さて、次はどことどのチームが勝負するのか

次回に続くのであった

かるた大会（閑話休題）（後書き）

作者「咲夜ちゃん！」

咲夜「なに作者？てか、かるた大会とか、ほんとに何なのよ!？」

作者「だって、しょうがないじゃんか、忙しくて大変なんだもん！」

咲夜「だってじゃないわ!まあ、一回戦目で勝てたから文句は言わないでおこう」

作者「ああ、よかったあ・・・」

咲夜「では、作者が大変なようなので、更新が遅れるかもしれませんが」

作者「次回はかるた大会二日目ですので」

作/咲「どうぞご覧下さい!!--!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4710z/>

---

異世界情報屋になったぜ！

2012年1月3日00時50分発行